836
209
3

芳草年録

堤蟻叢書

六十一

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

堤蟻叢書　六一

国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

癸亥叢書　第三輯

○五月朔公辺御役替　五月廿四日到来御直書状之通英吉利公儀被仰付候

尚吾ゟ度根数之儀ハ所詮略　横濱御固御役

松本俊為両名

依之申立横濱程近ニ付　同日横濱住居被仰付

同夜所々行之通ゟ之火所ゟ我ゟ

廿五日ゟ松本御役所

廿七日　松本ゟ英吉利公儀

初而妻子ゟ両人村勝ゟ藏ゟ

在国之儀ニ付

五月四日品川宿老衆ゟ之通報

七月七日小笠原図書頭殿流罪

同夜横濱同役両人

#廿日ゟ松本三子屋敷

今廿日ゟ相続仕候

同廿日新橋ゟ東北所々通

五月八日ゟ之分

以上

同廿五日同断御発足ニ而

十一日ゟ通増住居ニ付

五月九日横濱手行ニ而通

同十日ゟ沈黙

同十一日ゟ通大坂ゟ迎ニ来

同十二日横濱ゟ帰着

五月九日於吉師三修教ゟ之通ニ而

常時辻占吐

落話

同十日ゟ沈黙

小笠原図書頭殿ゟ之

横濱乱闘騒擾ニ付五月九日ゟ十五日迄

五月十日新橋ゟ張紙

横濱江ゟ之近事

○横濱町触

五月十日

高野藏書

大正 9 5. 27 購求

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

京畑屋主宅八ツ時出火之節五月十一日…ニ通　五月八日三條殿福山家へ届書　五月廿一日彦根藩之御達書

五月十八日
尾水両侯上京之節下書　右同　仰出之儀ニ付　五月廿六日三奉行上書　附　再應達

一　揖斐上京之節下書之写　五月廿六日京張札并彦根侯事　在太田陣依又五月廿七日之達

同八日九日風説三條　五月廿七日八十九日風説書　五月廿八日
廣島芝居見物之…　五月十一日
彦根侯…

佐倉侯相模国両国ニ付出札　神奈川奉行風聞… 　五月廿八日
永井何侯…　彦根侯…神奈川ハ…札

小笠原閣老…　五月廿六日同所船　五月外国掛様辭令
十八日
長州侯ゟ…亜船…

五月廿一日婦女致道難之　御近振　大目付ゟ達…　五月八日日本橋張札

同やんれぶし　五月廿四日同所触婦女殺刃傷之　薩藩田中雄平太近稿…　小保…人数…

婦女殺刃傷三人之…　匿名書　五月中神奈川商外国人へ交換諸物数及金数

小笠原閣老ゟ各国権官へ与ル書翰及各国官返翰共九通

已上百二十七條

六月二日大目付ゟ御通状万石以上朝覲之仰出　同三日同上上京割替十二通　風聞二條

若州侯ゟ当所知大坂ゟ…　六月三日火災同時西丸…上　同五日神奈川奉行浅野備前守知…　七日
若州侯ゟ使者

同八九十日御沙汰　福山侯ゟ江知ゟ上京之事　六月十一日
長州攘夷手始之事并京師之風聞

六月八日 霊岸島杉本氏火事之…　三日出火加州邸之話

長州砲戦手外国船開兵端始末

六月四日
在太田営某氏書柬　横濱詞役内文通　長州別條　六月九日武蔵紀聞

在太田戍営某氏手帖　六月十日亜船…ホン一所破話　六月十八日九日在府前田某手翰　横濱吉田町関門上番之話

小倉…之話　六月五日 物品…　亜船水先案内庄蔵口書　越高田へ長州ゟ来状　長州へ…使下向之事

六月五日
長侯届　…　六月十日五日十六日砲発之事
長府侯與長崎鎮台書三通　尾崎清五郎話　五月十日十三…　六月…
六月…日長州発十二日大坂…状

異国船一件御届一條　五月十一日長州ゟ届　五月廿三日廿六日小倉侯ゟ届　…　六月朔日…小倉ゟ届…

横濱新聞紙　仏国船水先案内…申口　蘭新聞紙　六月朔日…
長府家老女の文

長州ヨリ届二通 朔日ノ飛脚ニ了 加加賀家老共出京ニ付別紙一通

松子遅滞ニ付長州ヨリ届書及建言 ○小倉侯申上書 松

松子帰京ニ付同人ヨリ届書及建言 同断差元ヨリ評ス

基氏書簡二通 風聞書長州ノ

長崎奉行交代ニ付出発中ニ付延引ノ儀 已上九月三十六條

六九 月中京師新聞

九月朔日 米弥紀子 九月五日 宗里奥大夫天誅

出火ニ付火ヲ見ヲ以出及九ツ時ニ配ラ 作出

五月廿四日 一橋公ニ慶司殿下辞官被差 右両條ニ付在京ノ侯見込ノ写

九月廿七日 姉小路殿勝宮及其旨吉村路銀 薩州藩論ヨリ国家大事ノ

六月五日 中川宮建白 方今傳奏ノ家ヲ

諸家ヨリ出ル書札十二通 来子京都守護職士二侯

六月十四日長州ヨリ我ガ軍ノ敗 六月十一日 公武ヨリ

別條前書 玉川紀子ヨリ

千代田形ヨリ 京都別条

九月廿六日 姉小路殿遭難 同上戦仁礼源太夫傷ハル

三一氏ヨリ 英国ヘ償金千百万ドル十二日上

九月廿七日 宗里奥大夫天誅 作出

同上十三侯 小笠原侯近臣ノ預

六月朔日ノ傷ニ付届 諸公ヨリ

六月八日ノ宮中ノ争論 牧野侯諸免許免除ノ

五畿内山城通行ノ 太政官ヨリ四ヶ所

諸家ヨリ侯辞職表 ヨリ

松子戦争ノ始末 加州世子ヨリ

望月事件ニ付同人ヨリ 宇都宮侯ヨリ

望月事件ニ付同人ヨリ 長州毛利本藩ヨリ

六月廿七日 同人ヨリ 新番ヨリ

七月四日 加州侯ヨリ 世子彩覧所望ニ

大坂滞留諸藩ヨリ

擬侯陸続作ル 地

公方様参内ノ次第 六月十二日ヨリ

六月十八日ノ宮中ノ争論ニ付出

六月十八日ノ宮中ノ争論ニ付出

同上 諸公ヨリ

六月八日ノ宮中ノ争論 侯達

侯達短歌

五畿内山城通行ノ 侯

諸家ヨリ侯辞職表 ヨリ

松子戦争ノ始末 加州世子ヨリ

望月事件ニ付同人ヨリ 長州毛利本藩ヨリ

六月廿七日 同人ヨリ 新番ヨリ

七月四日 加州侯ヨリ 世子彩覧所望ニ

大坂滞留諸藩ヨリ

七月廿四
細川候家兵ロ先手之面

○五月朔日 昨夜發

陸軍奉行

神奈川奉行

騎兵奉行

寺社奉行

土井大隅守

騎兵奉行

山口信濃守

歩兵奉行

溝口伊賀守

○五月五日 今朝御到来御直書状写 同日午刻渡說在之

覺

英夷一条追て及切迫ニ付帝支撰報告の今晩より兵端を開候ニ了承之旨御請有之候処辛丑ニ拳動ニ及候ハヽ其一家共ハ勿論ニ候得共万一ニも心得違之者有之候ハヽ厳重ニ可申付候間其旨可相心得候

五月

覺

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

同文等ニ至リ候ハヽ其心得ニ而人数出張之事ニ候間
等閑ニ不致様ニ可申達候事
数百里之内
五月四日

一 英吉利応接掛ニ切ニ申付候ニ付而ハ
扶助等ニ関ル処ハ従前之通ニ可相心得候
尤彼ニ等閑ニ不致様ニ彼ニ於而十万ドルニ可満ト申ニ付
合兵ニ中ニ預候一條ニ而ハ大ニ憤り一切右請取ニ
ニ限ル之事ニ候間其旨ニ可相心得候事
但開港之儀ニ付一左之通ニ彼ニ申聞候事
五月四日

一 松平左兵衛督 先年アメリカニ仕(ツカハ)シ之節ト
又水戸前中納言(ママ)ニ仕シ之節ト
京都ニ而ハ何ニ之差支モ無之候ニ付
今度ハ特ニ今明ニ上京之事
一 過日被渡候引上兵ノ隊長物頭
三百一橋卒五六拾
一 堅被申渡候ニ付
一 今日ハ何ニも引続キ可相成ニ付
兼テ撰ミ置候よし
五月五日

一 夕七時前彦根藩一隊之出張を観る行列大略左之如

騎馬人
馬上持筒 拾挺 歩卒五本 侍一人 指揮 騎馬人 小野弥一人
歩卒人

○一 松平左兵衛督 先年アメリカニ仕(ツカハ)シ之節ト又水戸前中納言(ママ)ニ仕シ之節ト八ツ半ニ京都ニ而ハ何ニ之差支モ無之候ニ付今度ハ特ニ今明ニ上京之事

一 過日被渡候引上兵ノ隊長物頭
一 三百一橋卒五六拾
一 堅被申渡候ニ付
一 今日ハ何ニも引続キ可相成ニ付
兼テ撰ミ置候よし
五月五日

一 夕七時前彦根藩一隊之出張を観る行列大略左之如

騎馬人
馬上持筒 拾挺 歩卒五本 侍一人 指揮 騎馬人 小野弥一人
歩卒人

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

小院十人
小院一人（内二人交連有）侍一人 掟
小院十人 侍一人 並 小院一人 小院十人 小院十人
小院十二人 侍二十人 掟八自携（内二長刀各里乙種之）
小頭一人 馬止之役 侍一人 長柄掟十人
〃十一人 馬止之役 〃 侍二十人 侍一人
〃（内二人ハ乙種ヲ持シム） 九人 馬止之役

侍一人 馬印（侍ヲ兼） 小院一人 鉦 鼓 螺 持筒之掟 隊長之錦貫名筑後 侍三人

馬止之役

侍三人 雑人 馬止六騎 歩兵十小隊 指揮士官十人 於本隊小隊小隊長而已ヲ除ク
銃士四人 小隊指揮士官一人

馬止之役

右之通高田権兵衛始行列前後ニ出張又ハ備ヲ離レ人数千人有之

一 馬上歩行ニ而ハ殊勝ニ割羽織皆脱礼ヲ以テ略ス

一 惣而一様之白服ニ羽織ハ一様ニ而ハ

一 笠ヲ馬止ヨリ受取迄ハ常ニ笠ヲ傾ケ居ル様ニ仕候事

一 長柄鑓一様ニ束ノ際ニ而ハ

一 二ノ手ハ今夕三ノ手ハ明朝出ル由ニ而人数千四五百人ニ而ハ

○ 一 横濱ノ面 運上所

一ノ柵

程ヶ谷辺ノ数言御ら作ル各宿ら作合ニ而ハ
宿継ニ而ハ後ノ日朝日到来

○ 松本枳谷

若暗ニ而ハ吟味ノ為井上河内守殿ニ而ハ家来ノ
徒士ノ人数ノ内ニ而ハ提灯ヲ出ス為ニ而ハ

飯沢善兵衛
栗山惣左衛門
（御使番ノ内）
関新兵衛
（御書院番ノ内）
秋元但馬守

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

書付を以御届申上候　右者昨夜各様より御届申上候通御付添罷越候処　五月九日

○神奈川奉行手附出役西村信蔵より只今横浜表より申越候趣書付

御手附出役より申越候ハ英吉利軍艦碇泊異船員数等相調候処

蒸気艘之異船も未だ出帆不致候　当時之儀以来右之趣申上候　以上

五月九日

当時横浜港内碇泊罷在候各国軍艦并商船員数調

一　英吉利軍艦　拾四艘　　一　商船　八艘
一　亜米利加軍艦　壱艘　　一　商船　五艘
一　仏蘭西軍艦　四艘
一　和蘭商船　壱艘
一　孛国商船　壱艘

右之通御座候　亥五月

○外国奉行菊池伊賀守様柴田貞太郎様御応接御委任ニ付追てミニストル江御応接之上当三日右様御座候処未御引合之儀日々ミニストル

国奉行衆より先年来御国之内ニ罷在候者共御引合相成候処御国奉行

浅野伊賀守様よりミニストル江右之趣御応接有之候処右様之儀者改方之

御決着迄之処何卒談判と申義不申付ミニストル并官之

義ニ付而者不相成候船将之アドミラールへ引合有之候而既ニ一ト任之

申出有之候然ル処伊賀守様より横浜表へ相越可相伺旨昨四日夜九ツ

時頃追々相待候様仰出候ニ付御国奉行衆御出張相成候処

御出張相成候ニ付今四日参り相待候様ミニストルより御答有之

不申候処夜ニ相成五日御出張之上談判之儀相伺候処ミニストル

之儀者右者船将之請合ニ而可致ミニストルより御答之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

門前ゟ芝辺海岸之分老若病者之類一時ニ不残寺社前御朱印地近在方寄ニ立退
可申左も主人并壮強之者ハ仕事ニ立退候義不相成候火之元等厚相心付可申候
右之趣海岸付町々江可相知もの也　五月
右之通従町奉行所ゟ仰渡候ニ付右混雑無之様御触候事　町年寄役所

〇右同日鉄市左門新橋より東北町々名主江口達写

此度横浜沖ニ碇泊之英国軍艦此今之模様ニ而者品ニ寄発炮致候も難計ニ付老若病者
之類并婦女子等寺社前御朱印地近在方寄ニ而立退可申旨被仰渡候間右向寄を始其余町々之者共芝
辺之者立退候を見受候而無拠義立退候様ニ付候者立退候儀合之儀ハ奉行所ゟ可申渡候事　五月四日

〇右同日夜南町奉行所ゟ急ニ呼出候而名主共談判之上右之通書付被下候
柏子木ニて続有之候節ハ三番組者呉服橋御門外三番組者芝金杉五番組者増上寺表門前ニ而御信可
申事ニ候ニ付今般右詰場所相改候并品川宿寄ゟ及出火焼募り増上寺近辺

一火消防之儀山内別当並之頭人足共御方并利ニ而相分仕方致候合可申上旨ニ被仰渡候右之通上ケ
以後三番組之義ハ高輪辺ニ而御詰所在五番組之義ハ芝田町四丁目札之辻辺ニ而御詰所在并品川辺ゟ
及出火焼募り候ハヽ三番組之義ハ何迄も居町寄御固心底ニ不相成義ニ付五番組二番組出張致
御備候上ニも寄候ハヽ焼込候ハヽ五番組人足共松本町辺有馬中務大輔様御屋敷を境ニ防留
人二番組ハ増上寺火除明地并ニ武家方并金杉同朋町を境ニ消留候新堀川を隔り防水
之手并利も可有之候間武家方之儀防ハ遠近之義有之前広ニ家作をこわし勢を付候而其余焼
募候儀も有之候間為心得申達候

右之通私共火消人足頭取共江談判仕候趣申上候以上

五月四日

町火消　二番組　三番組

五番組

世話掛り　名主共

〇一近頃之内三人ニ而不快ニ而御登城無之御老中豊前守様小笠原様御不快四日之八ツ時小笠原

太田殿

候ヲ歩兵井上候ヲ引率五日ノ昼過発途
二日ノ路程ヲ五日ニ行同卅四日ノ夕着ス
皆ノ出迎ヒ有之ニ付家従ハ此ノ辞職ヲ告ケ
ル二付川口ノ事ヲ依頼スル事ヲ承諾ス
ル云々ノ書アリ是ヨリ前ノ秩云々

○一 十月七日未明ニ公原国ヲ発シ松葉氣ヲ経テ

○十月八日

講武所奉行並
歩兵奉行 松平備後守
中奥ノ小姓 朝比奈伊賀守
外国ヲ兼ル 向山栄五郎
御目付 滝田弥九郎
歩兵ヲ統ル 川一学

騎兵奉行 御作事奉行 神保伯耆守
中奥ノ小姓 赤松八兵衛
歩兵頭並 第宮 平岡円四郎
一橋用人

○一

次ノ手紙ヲ以テ申ス処ノ国ヲ発シ候ノ後ハ例刻ヲ以テ城ヲ発シ
日ヲ累ネ漸ク仰今暁七半時無事新宿ニ着船品川ヨリ
乗船ノ節ハ多人数ニ付多端ニ付キ格別ノ労ヲ
労ス一通リ乍ラ取急ギ此ノ如キ云々

○十月九日

銀三十枚
巻物五

在所ヨリ時ヲ得候ヘ行ナリ

右ノ白書院縁頬ヲ申列座ノ向ヲ一ノ間ヲ以テ伏ス
一ノ間ヲ伏ス
一ノ間ヲ伏ス
一ノ間ヲ伏ス
一ノ間ヲ伏ス

○一 同夜用番井上ノ向ヲ以テ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

横濱表唯今御警衛英吉利探索ニ付 何も変事無之候 川手行し

一ノ口ノ儀ハ十一日浪説有之

一 四日以来変化ハ武田耕雲斎之謀之由

一 十一月十日入港有之由何ノ事ニや

一 山形閣老京師ニ於テ辞職之由

一 松浦五一郎 澤勘七郎 両監察辞職之由

一 宇津宮戸田侯御警衛高崎大仏ノ山頭ニ長ク磯二門備人数ニテ辺ヲ守ル由
向紀侯小笠原侯も此辺ヲ御警衛之由人数何所ニ居ルや未知

一 十一月十日屯所ニ近キ歩兵鋲三百二十挺諸頭ハ騎馬ニ而陣羽織木草多クリ
品川ノ方ヘ出張スル由見タル人アリ何レノ地ヲ守ルや未考

一 同日夕逢スル如太田陣営より来ル
小隊之事未詳定歳入用而一両日ニ内ニ可被之あるり一ツ之仏営
物 ドロ銀而送ル昨日相済英軍一条異議有之成ル事ト御手当も今明
頃ハ御引払之返事被成事而御座候先ニ御手続之処相決候由
英国より之書面之写ニ候て 十一月十日

一 同日夕近ク松平侯人数三ノ手近去ト由何地ニ何ノ為ニや未知口浦賀港也

一 同夜四時之頃太田ニ来ル英吉利館ニ而ニ一分四ル三百三十挺相受
四番挺代五十五ドル之由之而ハサニハ一ツ引より今明日中ニ各中ニ分明有之
近ク御国内ニテ之事ヲ之節之挺ニテ為トニテ之ヲ御許之前文ニ流下ハ引之」

一 町奉行井上信濃守同日付松浦五一郎英使应接御委任ニ付より

一 今十日より於横濱表拒絶之談判ニ相成候ニ付应接之様張
有之候ハ近ニ兵端相開キ候も難計候ニ付兼而右之通リ被遂相達候一の被
心得トモ御数之衛御無諸手神奈川奉行より之御右御付之相心得候
儀ノ有之候ハ右之文一の通り御心得候 十一月十日

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

右之通御目付両人より昨夜中達有之、且右以達之通今般
評判相成候ニ付為念伺候処其筋ニ而も承知之旨新聞紙火急ニ無謂
を以訳ニも無之当分差置候由ニ而近々相違之御触書可有之
仰付候事ニ候一の事ニ付御尋ニ付何レ被致候積ニ而猶別
段ニ成可申候　十三日談

○五月十三日井上河内守殿御渡御目附御呈　十四日談之出

覚

一 非常合図之儀者浜御殿ニおいて火箭揚ケ候ハヽ右ニ而御曲輪内先手之
面之通右数寄屋町本陣者当番ニ付火之見ニ相図見届候ハヽ早速
出勤可致候、且諸場所ニ而相詰候様
右之趣万石以上以下之面々江可被相触候

○横浜増徳院裏山ニ而外国人数引続射撃有之候ニ付追々一の殺
成り候旨足達之人数之儀ハ御陣屋ニ罷出候
右之儀一昨十日神奈川奉行御役所伊豆守殿より達有之候　十二日談

一 近頃異人共外出之節者御定之道筋ニ而引続参り候処
所ニ而不法之所行有之候由ニ付其段陽地ニ而何ニても遠方之所出立之
様ニ而も候ハヽ不日ニ御引払ニ相成候儀ニ付其筋ニ而何事ニ而も夷
之者共ニ別ニ而人数を備置候由右ニ而御急キ之陣屋ニ而取計候ニ而新
規之何分之指揮之趣遠中ニ而諸家様方を物見として不日迄ニ引払と申住吐年之士
銃等を携え申候処然ル所相川ニ而蓬莱神奈川之方へ近く追々遠ニ而人合候ニ付而不
残之右物見として罷出候士追々ニ参り申候是者江府御役家方より出候士ニ而可有之由又々
神奈川台石崎辺ニ而大砲等有之記ニ相違無之候由今夜中

大砲打方致候中右者と夕刻ゟ発砲致し其ゟ市中ゟ火あがり依之寺前之此方者勝と
成申候処先是迄右之家主共傳之忌以来相守り居候処程ヶ谷横濱市中ニ而町家も
同様ニ而引付之住宅ニ而も相手前荷物送り出し候又は来遠ニ而外之且又出帆之処御追払之者
有之候ニ付英人相手ニ而相成候其後夫迄ニ而取計候ニ付横濱ニ而英國コンシユル
ニ而鎖ハ日本人共江不申聞候様相達候よし其外様切迫之形勢有之候心配仕候八日
迄ニ而右各國コンシユル本国江引取（此節荷物舟中ニ運入之且来遠と申事）其時ニ而英国之戦争之積りと相見申し
御奉行所ニ而も右之者共ハ切と只今大坂府之方之支配ニ而其身之話合ニ付候よし江府へ誌
到来致し候ニ付京都ゟ御届之趣ニ而御物之御内談有之候よし何
ニ候得共近キニ而是非之節ハ申上候事ニ而大名其場ニ付候而江戸付下申候役人心配仕候
方様相成候得共何とも江府ニ而居候と追ひ日数ニ至之ニ而更ニ持ひ来候場所ニ付早急之
場ハ追々之義ニ付江府ニ居候ハ情合も又御役ニ相成候然ル處九日夜傳馬町ゟ歩兵二三百騎

程上陸之御達し其ハ頻ニ陸書英吉利ゟ之貸渡しニ脈傅馬ニ而貸渡之件右場所迄ニ而
不申事ニ而自分之実情之内話（後日之以外ニ申之様とも申事もし）其後以右当前ニ而符合申候節紫様ニ而存も
處十日朝ニ至り詳眼の鏡ニ而見候處右傳馬町之場傳馬町ゟ弥々傳馬又大木を伐採比
なくして其みと申者ハ情々之ゟ人ニ而何とも云ドツタリ落る也右不審ニ存其者佐木氏
一同御固場所ニ而陸ゟ右山ニ而伐採来遠ニ而相夕刻より之ハ英館ゟ詳眼ニ而覗候処無形
場所其以前なる事ニ御座候
初而何心なく谷之様を出候處之英人ニ而も御辞集日本人も皆同所然ル處其途中ニ而英
館之門前ニ英國之館ニ而兵ハ横濱之義之ニ相係立並び歩卒兵海岸之處を持而十四五人程ニ
立並居候處門番之者ニ而も立寄候處先達而館中ニ而日本人之婦女子多
く出張師ゟ門ニ出て人物改有之候此処打付立し英館ゟ車三輌車力共押出し
白木之棺一車ニ五ツ宛乗せ新波止場へ引行し右車右館ゟ歩兵共一円ニ警衛

浦賀場より小舟ニ積之軍艦へ不申やみ咄し[illegible]数へ引返し又三車押行々猶前

之外くこの[illegible]を行程の何にも差懸りに[illegible]婦女子多く見物出し 車ニ乗り又ハ四ツ手篭 乗船物ニ乗り多く出し

右洋銀四十五万ドルと申す車力を[illegible]男まで場ニ来り此ニ申し 然ハ甚不審なるハ

羽大き二艘ニ小舟を見物いたし[illegible]一艘ハ洋銀の七人ハ佛蘭西之軍艦ニ揚ケ

し一艘ハおくり[illegible]右佛蘭西之舟へ入[illegible]行なる[illegible]又ニ解[illegible]ハ以て

かなる此ニ申し候る者ハ右佛蘭西の山を伐[illegible]佛蘭西之舟ニ洋銀を送りしもドツタリ

差ニ洋銀の[illegible]

ひ去パウト[illegible]

方ヶ畑[illegible]氏[illegible]

も行列[illegible]行やと[illegible]日本語

ら中[illegible]一たもれ[illegible]

時銀を各国ニ配[illegible]

御徒目付[illegible]八日まで[illegible]内密ニ[illegible]八日之夕一同ニ酒を呑[illegible]

の何にも機密を能く探り[illegible]地獄[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]別段ニ[illegible]

五月十二日

○或者之話 四十四万ドルノ洋銀を英舘之庭ニ積置 三井之召[illegible]改究 改[illegible]

[illegible]

○五月十三日

尾張前大納言殿事 公方様御上京御滞在中御政事向輔翼[illegible]

被[illegible]

右之通於京都ニ被仰出候[illegible] 五月十三日

十四[illegible]

○五月十四日

○一昨十三日四時右田陸奥守殿御来る人々に吹聴を揚ケ多り客ニ被成四五十名ヶ発セリ客被成ると夫ゟ

○一杉浦関門ゟ帰府仕士ゟ杉ゟり石崎関門ゟ迎ひ岡部侯野毛稲垣侯石川杉ゟ

○一かゝりゟ皇賦ノ歩兵四百人計本牧北方村ゟ回四百人計ゟ

民家四五間満む有の旅宿ゟりゟりゟ云

○一五日ゟ昨ゟゟゟ候市中の石燈ゟゟ芝山内守屋ゟ伊右衛五拾文分

ゟ名様の御ゟ一但大きニゟゟ雪住ゟ供ゟ小石川伝通院ゟ迄ゟ分鴨薬

豚満ゟ有私ゟり新田ゟ大光院ゟの休所ゟゟ内活実伝ゟ伝

○一ゟ昨ゟ市中街衢ゟ夜石商賣如何ゟ体ゟ所業ゟ也

ゟめ参ゟしゟ弁形有ゟ士有二人ゟ七止ゟゟリト見ユ

○一昨夜ゟ明石町ゟ陳ゟ築地ゟゟ屋ゟゟ収の死ゟゟ夜ゟ供ゟ由同所

講武所ゟゟ既ゟ護胸壁ゟ築ゟ居ルゟ見ゟリ

○一和川侯桐野ゟ伊藤ゟゟる京都ゟ来ゟ仰ゟ勿論の代ゟ出来ニ浦賀奉行ゟゟ

○一昨夜話今日往検演港敗○杉浦諸奏州ゟ各国兵卒ゟ守ゟゟ

無ニ大名ゟ守ゟニ止ゟ有ゟ止ゟ有ゟ義ゟ杉ゟゟ

ゟゟ切りゟゟ兼猟ゟ由有ゟ雷雨ゟゟ吾所守未ゟ由○英ゟ松十日ゟゟ被

退帳ゟゟ幸艘ゟ不動依無ゟリ○昨日ゟ信地ゟ武器ゟ送ゟゟゟゟゟ

○五月九日杉浦演ゟ行ゟ仰ゟ振

英国軍艦一条ゟ着ゟ杉 御上ゟゟ国ゟ軍艦乗組ゟ

英国ニ洋金ゟ相成ゟゟ柄行ゟ

ゟゟゟ交易ゟ後ゟ近ゟ通ゟ弟ゟ

さあ石炭仕入おも十分ニ致し申筈ニ御
和らく　　十月九日

○此度攘夷期限の決定ニ付何時兵端お開
候哉難申置る迚兵士早ニ此砲台へ繰込
長き人ニ和泉守十万石大砲ニ而打払い銃三挺豪傑二疋相定
各藩初様ニ而上る迚親則お定ニ而早ニ
三条中納言殿ニ而取次ぎ西園寺様

十月七日

○当時辻うら咄

寒東ニ而ハ一ツ二ツ祢へら又京都ニ而養な事ニ而いろ〳〵
そふ〳〵つのそう叡慮ニ而祢へ嶋津ニ而ハ随分ニ迚厚込ぶ禁
利ニ而よろ〳〵な事ニ而夫ニ而ハ将軍家ニ而宮家お
白たふも祢ニ事ニ而なんぼ嫁の位がすき多つ〳〵のさふんぶのとそんな
御上洛な事が有とんニ長州そんな事が出来ニ而ハ後ろ田あ咄
が祢ニ而ふもんぶ迚使のやつが大原のふニ見せて中山さんニ
くのふこぶ〳〵やつがつて金の事ハ肥後ろ田あ咄
ぶやつお〳〵誠ニ春山獄ニいけぬ今ニ御老中ろなの年の若狭ニ善
請ニ而婚礼一件大騒動ニ而水戸ニ而ハ御老中ろなの年の若狭ニ善
一なん安藤ニ而ハ合ハヌを打て笑ていろふとうく井伊家
でも水野流ニ而身の行末ニ而ハ志ぬ〳〵ニ而ハ一格ら
ニ而ニ源氏ニ長者ニ而ニ氣ニ而大原ひ〳〵ニ而やつ

○落ニ而

野奉行ニ而町人ニ而呼出ニ而役行渡ニ而

町人も近頃諸色高直に成ゝ難渋なる事で
町人昨年秋以来福高に改セとの御触でござりまする故よか仕ゟ
ヤイ汝等の上洛の事ゟ聞やうな
綸言汗の如し
○浪士大勢ゝる両国の茶屋へ集り警衛呼寄セ駆しまる浪士殊の
外元気ゟ者義ゟ者のゟ
ゟまあらさふていけませんよ
それ〳〵豊度ゟ左ゟ門でもおやゝゟなさい
浪士イヤ豊度左ゟ門ゟ実ゟ者ゟ義士
ゟゟ豊ゟゟゟでござんすかゟ
右ゟ柳馬大膳亮阿部播磨守代ゟ警衛ゟ
左衛門尉ゟいふ様ゟ右京亮上ゟゟゟと領ゟ大久保加賀守ゟ小栗ゟ領ス
浪士乱妨ゟ由て書家市中取締ゟ仰付
ふ
土佐
ゟ出つゝく
長州
ゟ秋ハゟゟゟ今ゟ
おさらひ
漢学
ゟ
ナニヤヲヲ
ケハ子〳〵

○去月廿一日大坂表ゟ被差越候海岸ゟ
暁九半時ゟ無拠ゟ大坂御城
ゟ
還御被遊候旨注進有之
右ゟ趣両ゟ両被達候事
五月十二日
○五月十日御触書ゟ内
御用
井上信濃守
御目付
松浦亀一郎

外ゟ拒絶注列ゟ事仕ゟ通ゟ事十ゟ云斗ゟ
作者之

右於当所前廻向内ニ申談し書付差渡

○小笠原壱岐守殿家来

前書差図之通相違無之候ニ付帰府ニ付而ハ御作事方ニ而一通ハ受取置候而ハ御作事方ニ而ハ受取不申候ニ付

○御作事四月九日之内

大目付

長崎奉行

右於京都ニ作事千

五月十一日

○御定之外格別之御手当

○御定之外格別之御手当

之事ニ付

新徴組支配

五月十四日

加判之列席被仰付候ニ付而ハ延年之儀ニ付而ハ

役ニ付而ハ延年之儀ニ付而ハ延年之儀ニ付而ハ

五月十五日

酒井左衛門尉

家来九人ニ而

御作事方御作事

内之通ニ候事

浅野伊賀守

京都守護職

本役ニ而

川路聖謨

勘定吟味役

兼而

中條金之丞

目付ニ而

太田備中守

右京川家

浅野伊賀守

京都守護職

本役ニ而

川路聖謨

勘定吟味役

兼而

中條金之丞

目付ニ而

太田備中守

右於京都ニ作事千

五月十一日

○小笠原壱岐守殿家来

前書差図之通相違無之候ニ付帰府ニ付而ハ御作事方ニ而一通ハ受取置候而ハ御作事方ニ而ハ受取不申候ニ付

○御作事四月九日之内

大目付

長崎奉行

右於京都ニ作事千

五月十一日

右京川家

浅野伊賀守

京都守護職

本役ニ而

川路聖謨

勘定吟味役

兼而

中條金之丞

目付ニ而

太田備中守

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

五月十六日

[illegible]
[illegible]

五月十八日

今般　松宮孫七郎　仁位村幸宇和中村ヨリ東向ニ而有之候定人ニ仰付ラレ

一　近日樫原沖外国船日ニ退帆ニ而沖合多十八九日頃ニ至而漸ク四千石積云

一　増徳院山上掃部頭西新館地ヘ即今引移ル大普請ニ取掛ル云

一　五月廿日稲葉伯耆守仁位村幸高峰修理代宇七ニ日所見士官

自ラ相馬人衆ヲ引

五月廿日　戸穴務右衛門ヨリ仰渡

神大川宮若之

鈴木源吾

英吉利国軍艦漂来ノ節取囲ノ手配ニ付テハ右ヲ第一ニ相勤ノ筈ニ候ヘ共追々ノ節ニ而ハ人数ノ都合モ有之候ニ付テハ其時ノ模様ニ寄リ人数ヲ増シ又ハ減シ候儀モ可有之候ニ付テハ其時ノ模様ニ寄リ人数ヲ増シ又ハ減シ候儀モ可有之候

別書之通リ人数割ヲ以テ相勤ノ筈ニ候ヘ共追々ノ節ニ而ハ人数ノ都合モ有之候ニ付テハ其時ノ模様ニ寄リ人数ヲ増シ又ハ減シ候儀モ可有之候

之旨横濱奉行ヨリ申来ル依テ此段早々順達為可申候　以上

銘々後世向安堵致シ候様ニ存ジ奉ル候ニ付テハ小前ノ者共ヲ近ク不洩様申通ノ筈ニ候

五月十一日

[illegible]

一一昨九日洋浪五拾万ドル車ニて英吉利ニ引込候事ニ
合候ニ付ト申ハ実ニ歎ケ敷事ニ
ニ

○横濱風雨雷撃之事

十月
當九日夕ドル銀四万両ニ相成ル迄英弘ニ外国ニ永ク引渡
又英国人ニ調練ニ付奉行ノ部村ノ役宅ニ禮ニ参ル内調練ニ
六七日ニ此度初而ノ談判ニ相掛リ岩原ニ参候ニ付
蘭トアメリカ別段ニ相願ヒ得ニ是迄ニ通免ニて
和蘭アメリカニ当国ヲ得ル様相成外ニ国ニ者
ニ新有ニ戦争ニ付人数ニ元ノ如ク相成ル
只今ニ切ニ
雷撃ニ仰天ニ申ス
ニ限四十五万ドルニ申ス本金ニ直ニ二十四万両ニ
ニ當九日夕ニ運上所ニイキリスニストルニ役宅ニ六車引込拾四万両ニ相

其外ニ国ノ人数諸家ニ増減ニ有ニ乱風ニ

成ノ由ニテ兼テ一万両ヲ以テ二度ニ相成ル筈ニ
英国ミニストル門前ニ旗ヲ持駐馬ニテ警衛ス
国ヲ外国ニテ高官ノ他ニ優ル
一諸大名方ヨリ国ヲ
横濱表ヨリ出張ノ達上ル
外国人ヲ追テ諸大名ヲ彼ニ引
ヲ以テ事行家ヲ右ヲ全ク浪人ヲ国ニ
ル故ヲ以此度横濱ヨリ関門ヲ
名ヲ国ヲ横濱ヨリ外迄ノ
之但三組横濱表ヘ出張
一英国高官ヨリ云ヘル
河ニ五ヶ国交易ヲ定ル通
ヲヲ定ル迄ノ
相成ル関門ヲ
其方ヨリ不念ニ
外国ヨリ
仕ル其上フランスヨリ
當十ノ増徳院裏通ヲ
一横濱ヲ村町ヲヘドル銀
村ヨリ
堀田相模守ヨリ
一堀田相模守ヨリ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

野毛橋吉田新田通四国ニ而屋

一 同夜横浜ニ而英人殺害之儀ニ付石谷村右衛門
来ル廿一日ニ評定所ニ而
奉行衆ニ御尋ニ相成候ニ付
御用ニ而御呼ニ相成候由

一 当十日イキリス人ラニス人共ニ六百五十人程調練ニ
罷出候ニ付石谷清昌ニ而先手ニ而人数ヲ繰出
候神奈川ニ方ニ而敵ニ而ハ無之引続調練ニ而
何方ニ而ハ敵ニ而ハ無之ニ付
奉行所ニ而ハ届ニ而ハ無之由ニ而
成程ニ而ハ敵ニ而ハ無之ニ付
行衆ニ而ハ敵ニ而ハ無之ニ付
候ニ而ハ無之ニ付

先手ニ而人数神奈川方ニ而敵ニ而ハ無之ニ付
田村ニ而横浜ニ而ハ無之由

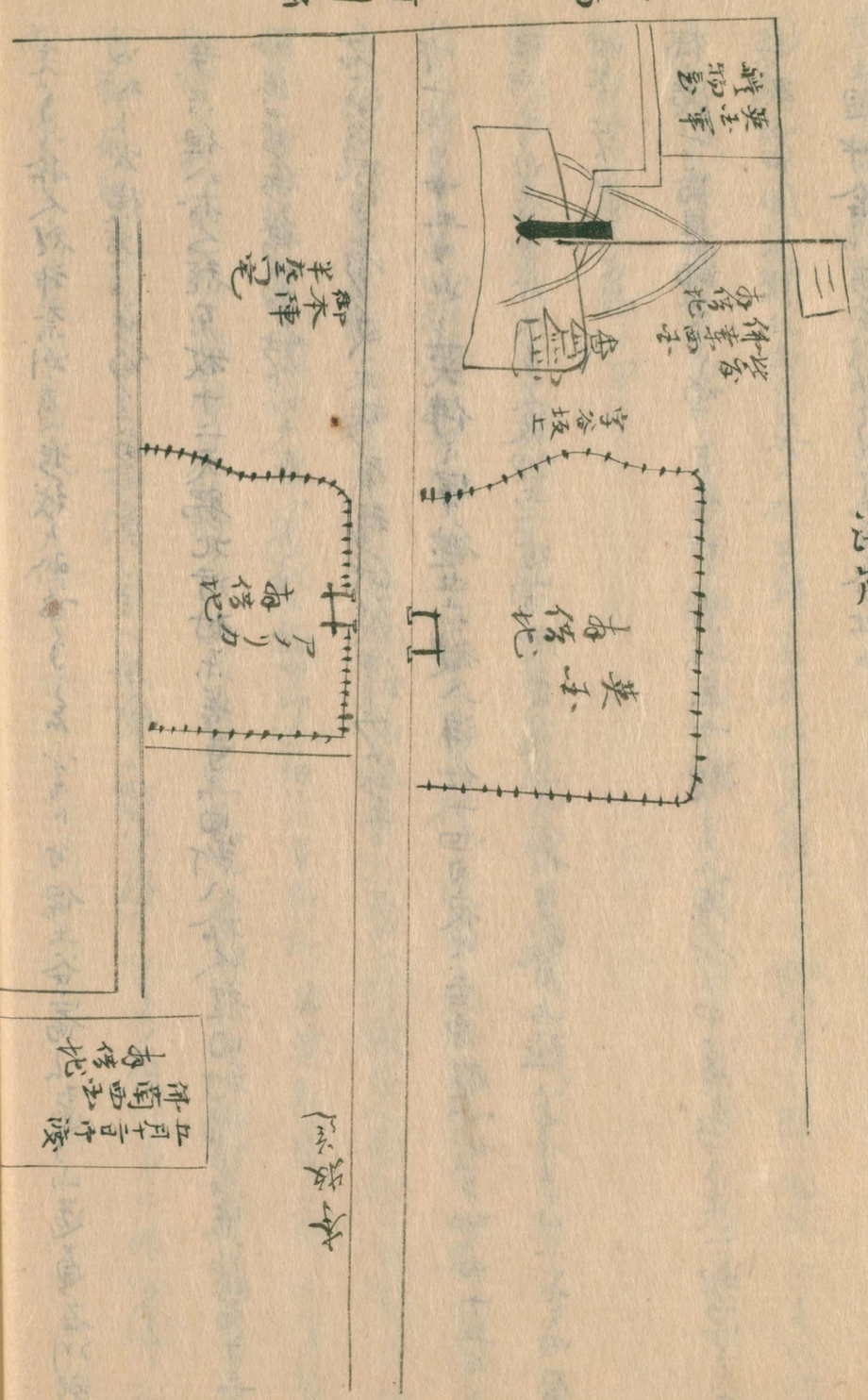
一 歩兵凡八拾人程本牧十二天脇北行村東善寺ニ而
宿陣ニ而ハ無之由

右ニ而風ニ而大砲ニ而ハ無之

一 昨十四日十五日ニ英佛ニ軍艦五六艘入津仕十四日夜ニ
横浜町ニ而ハ異人多人数押ニ而ハ無之
ニ而ハ無之

一 横浜町馬具師等ニ而ハ無之ニ而ハ無之
談判ニ而ハ無之

但シ合ニ而ハ無之ニ而ハ無之



○亥五月十二日夜新兩替町四丁目中程明地板塀、美濃紙に太筆認め張る方名書物其傍墨十三日月番南町奉行所西許、相改寫

我　皇大國彼ノ醜夷之爲、蔑侮汚穢を蒙り我是爲切齒痛歎する事既、數年然るに、今年二月中英夷之軍艦渡来して英國ゟし來る文の多脇島津三郎一族を不引渡ニ付ては、五十萬ドルラル外、三萬トルラルを可相渡若兩條を不相成ゆゐ、長崎箱館ゟ仏諸港を乱妨ゟ旦江戸大坂とも焼拂べし、と如此の手禮驕慢　我國をして婦児子の國たらしめ誠ゟ以怒激發憤の至りなり、夫蓋是等を素ゟ我を侮慢して膽を冷さしめん數多の大筭を貪らんとの企計のゟ實ゟ衛を切肉を喰いてゟ猶足べきるを老中井立河の守度杉手書前等度ゟて如ゟ膺病應接の事其企計たるをもらん大ゟ豺狼狽

して重大の事件として松平春嶽公ハ速ニ井掃一ツのいたる申談さつと取用ひ
無之暫之期日猶豫申入處彼益増長して一刻も猶豫不相成旨乃断ニ
付右之二老吏深く恐懼し低頭平身して佛英之ミニストルニ取扱頼入割其節ニ
至りてハ四十万トルラル程の大金を英夷ニ可渡こと詳判ニ及ふ所誠以悲哉血涙止
兼のふ候然るとも右両老をえらび大島因循の惰被よりも為無論なるこゝ尽しさ
仍ても水戸中納言殿一橋中納言殿ニも既ニ歸府して在府なら如此の所置
ハ如何成故ぞや前中納言殿黄下之　靈神ニ對し何之面目あらんや亦其臣下一人
も諫めるもの無きやと水府の武威ハ既ニ此りと書る嗚呼如斯國辱を面皮ニ
糧して何それ恥しく句し誠の心ありやそれ改府大小の役人を皆國賊ニして神
罰免るまじきの事也仮令如何なる深謀遠慮鎖港の義あるにもせよ無
礼倨傲傍若無人の書翰を持參りて其使の首を刎るけれとも不成剥裂す

為く大金を取渡すハ實ニ　皇國ニ大恥にあらずや永く志史ニ止め後来英夷ニ口實と
なられ豈悲しからずや此恥を忍ぶることと是を貪欲といふ我　皇國として貪欲之兵（一ニ與兵）ニ降く
しむ嗚呼此時ハ父君を殺せるの罪と何色はる而して幼少病弱兵するを恐れ大
金を出し謝さんとするハ諸人を驕りし天下を動揺さするとなり己く（一ニ自分）の因章慌
忙せしむ諸人迫是ハ為ニ大ニ金銀を貴さし然ん農民ニ農事を棄て天下を困窮させ
嗚呼何の面目ありて上　天日を仰ぎるや下萬民ニ對さんや志ありて自ら八尺寸死（死）
報国の志ある同備為国盧錫のこをすとし方の堤防の修ありや所人ニのミ報国
を忍せ死力を忍せ国恩を遂忘することなく今命のミ立つを出して何ぞ人皆恥か
如き藩禁ニ行ハん命を全命なくとも誰の報国を忘（一ニ志）さんや今吾切歯痛憤の至り
此書を認て天下有志の諸侯英雄義勇の忠士ニ尊く觀せしめん矣日我等覚を
率ひ集り水戸中納言殿並老中以下此両国辱をえ予しものも首を切肉を喰

て山処と曝し　天邪地殺の害怒と慮めんくすることを

文久三亥五月

皇大和忠士　島山九郎秋記

○京洛老屋宝八ヶ四月有る出立つる郷五月十日ニ

傳奏野宮殿下後ニ書付

攘夷如何ニ候哉五月吉辰迄ニ実定ニ答候様ニ　勅諚

有　梅園門下ニ来　侍衆松石ニ申ニ付　一人宛ニ而

可召連旨　梅園門下ニ来　侍衆松石ニ申ニ付　一人宛ニ而

召連罷出候様ニ　勅諚ニ付　兵器食料ニ而

俄ニ追々ニ　仕出ニ而ハ　右攘夷ニ差支ニ付

右門下ニ而ハ三條中納言殿門下ニ而ハ　侍ニ而ハ　仕出ニ而ハ

○一五月ニ而ハ三條殿ニ福山藩ニ而ハ　申ニ而ハ

此ニ而ハ　梅園門下ニ来　松石ニ申ニ付　一人宛ニ而

門下ニ来　小川藤兵衛ニ而ハ　兵器食料ニ而ハ　差支ニ付

五月八日

覚

藩長　大谷無之ニ付　伍長　大森棟之助

外　九人

右之通ニ而ニ付　五月八日

覚

大和三輪川玉河ニ住　小鍛冶八文字三枝　兼馬改

（下ヶ札ニ而ハ同ニ而ハ門弟ニ付　右ニ而ハ同ニ而ハ）

五月八日

一本ニ而ハ鈴木重胤ニ而ハ　申ニ而ハ　備前門弟ニ而ハ　多重書ニ而ハ

○五月廿七日夕伊家原伊峠出来安宇松右衛門書付

和泉相続ニ付而ハ刻限ハ好勢和摂海辺ニ滞船ニ而難儀ニ
付此度防禦向ニ付而ハ銃筒数挺ニ而ハ不足ニ付
相続者共ニ大砲壱ツ宛ハ御渡シ被下度旨ニ而
右ニ付而ハ早速ニ御渡シ可申旨ニ而
昨廿六日ニ紀州辺ニ而大砲壱ツ宛受取
帰帆之節摂海ニ而一艘宛ハ大砲無之者ハ
無用之旨

壱万石ニ付 人数四拾人ツヽ
内足軽廿人 小者傳奉ハ共

大砲一ツ 五六百目以上 小筒 二十挺ツヽ

○一 存寄別紙ニ心得共

井伊掃部頭

士ハ七人ツヽ

○尾水両公上書

奉謹呈候向暑之時ニ御座候ハヽ益御機嫌克被為
諸方ヨリ追々了合ハ参候一体生麦ニ而之事ニ付別事ニ有之候ハヽ攘夷ニ而ハ
相済ニハ参間敷ニ付而ハ曲直名義ハ不申ハ有英国ニ
償金ニ而落ニ談判ニ而ハ済間敷ニ付而ハ償金ニ而ハ
事情不相止ニ付而ハ御ニ而ハ大砲ヲ
外夷ニ為振ニ而ハ後年ニ而ハ必ス陸続ニ
成下候様ニ而ハ上ニ而ハ御手当ニ而ハ
水戸中納言
尾張大納言

前文　奏聞ニ付左之通
勅諚ニ　仰出之
英夷ヨリ之償金之儀尾張大納言水戸中納言以取計置候旨達
叡聞ニ相成候得ハ償金之儀ハ　御許容難被遊ニ付先達
御沙汰之次第も有之候処事情不得止之儀ニ付何分不
容易事柄　勅意之趣相背候而は何とも　思召候ニ付幕府
所置振言上可有之様ニ被　仰出候ニ付右夷拒絶之儀深以達
叡慮無貫徹ニ付此度所置振有之様ニ付　御所問之事
五月

○亥五月六日三奉行上書　三奉行者寺社奉行勘定奉行町奉行
今般攘夷之期限当月廿一日被　仰出候ニ付鎖港之儀ニ付篤ト勘考仕候処支那
和蘭両国之貿易ハ往古より御許容ニ而在留仕居候ニ付崎陽も同時ニ御拒絶日数三
十日を限り外夷一人も在留無之様可致旨被　仰出候趣諾り候而ハ難題
皇国闔境之全危覬覦之情を奮起し無名之戦ニ及候得ハ千万之失策ニ而挽回難
相成候間順序を以追々被及応接事理を尽し虚実寛猛之中ニ各分相立攘
夷之御運ニ相成候ハヽ御名義も相貫候而策略御設施ニ可相成と奉存候乍去方今
三港一挙ニ相鎖し候而ハ紛擾ニ至り時勢之安危ニ拘候而已ならず不論是非ニ而難題を相
掛り彼を知り己を知之候而不虞無之候得ハ蠻夷輩を開各国ニ御国地蚕食被致
候様之儀も後挙　一皇姓之皇統無覚束　神祖已来之御武徳も御頽廃
実以何共一ケ旨恐怖も無之恐入候　前件之次第被　仰立　御職務

御辞退被遊候御願ニ而江戸表ヘ御奉成候ニ付 和宮様天璋院様ニも仕候且万一御
願之被遊候上ハ御謹慎大切之御事ニ候間 直ニ 御沙汰成ら御恐縮ニ被為 在
寛大之 御取扱被為待可然様ニ奉存候 神君以来征夷之 御職掌
一時御廃申上候事勤候ハ如何ニも臣下之身分ニ而重罪至極難奉申上候
得共開闢已来之大患奉申上候迄も無御座候而ハ苦心之余密ニ奉言上候 誠恐
誠惶謹言

十月六日　　三奉行連名

右上書及一覧候處深切之次第ニ候得共傍ニ論判も有之候間尤ニ認候
今一応為念勘考有之度事

一 支那和蘭ハ同時ニ而拒絶ハ御難題之儀一応ならて候得者天保度ゟ度々
和蘭之申立ゟ虚喝と相聞候故先ツ一応ハ同時ニ相断追而右二国之儀
ハ別段談判可有之候ハゝ応接之振合ニも宜しかるべく

一 無名之戦争ニ而右ハ今度改而追々及応接内地人心之不服且永久国勢衰
弊之處を以申諭相断候上ハ彼ゟ兵端を開候ハゝ無名とも難申候 仮令方今之
処一時分裂之危急をハ逃ゝ相成候共却而内地之人心を惑起し国内土崩瓦
解之機難無之是等之一挙ニ倍し候変事差起り候ハゝ我ゟ兵端
を開候ニ相成候而却而無名ニ可陥候

一 彼を知り己を知ると彼を一の知る備ニ相得候而即今之姿ニ而ハ己ニ暗く候而ハ
内地之治術無覚束候

一 御職務御辞退之右ニ至極平穏之御所置ニ候得共征夷之御職務ニ而一ト度丈
御貫被遊候様仕度存候方今外国之存意ニ而如く寇夷一攻ニ接し相付
第一 御辞退之迄 御許容ニ相成大臣ゟ補様之任 勅命被

下ハ廿万モノ千萬不及ル

嗟呼徳川家之衰弱嘆ズルニ不堪ヘシ

○一 橋公工鷹司殿下書　十月十四日　慶喜　〇玉川手控中ニ有リ改略

別紙

異変之節ニ而者外ニ而於テ先年既ニ去八月八日御参内之節ニ而別紙願之通何卒
御聞済之儀被仰付候様奉願上且大和守備前守并四郎丸迄了其筋へ之因人々
御座候ら遊ス様奉願上候云云

○

井伊掃部頭

一 其方実父先年恐多くも　先帝之　司論見致悪逆無道枚挙難数速ニ一可加誅
戮ニ不得止傍家共度致之弟之大膳ニ且旨有強行常京之天下之
有志之者公君臣之可加誅戮者也

亥五月十二日

○五月 御沙汰書鈔

初日二日三日　備中守殿御用番ニ付御参候　惟之

三日 洋書調所調役組頭勤方

四日 二丸御留守居次席之軍艦頭取

三之出大之格之軍艦組之　何々文字之通御達候之

右之面々　之軍艦頭取

備中守殿ニ而御参　惟之　同様之参候　惟

洋書調所調役　榊原陣太郎

西丸上席之軍艦頭取　木下謹吾

同頭取次席之御勘定之軍艦組出役　力石太郎

小十人格之軍艦組頭取　小野友五郎

○廿六日 備中守殿御用番ニ付参候　惟之

今朝加藤文八郎ヲ以私之格子之内ニ罷出候ニ付子達之御小人目付西村信蔵方へ在勤問合候処五
日六日運上所休日之由出勤不仕へ共船出入之候も其向ニ右之役方へも其都度ニ了承了
右両日格別出入御座候ニ付何も後刻運上所へ出勤之上一々了承之了以文如此

切迫致いさ談戦争ら相次い事柄ル其隙ら伺合仕ら条一行敦賀ら着ミニエル ミニストルホル横濱表居留地ら当八日迄ら引揚ら風聞ら右情願了間ら紙破治調ら儀ら内旨ら趣ら仕雑ト存候ら付申上候以上

五月七日　　王　九門様
　　　　　　　　　　　　依田又兵衛

一 両玄五月八日大丙ら陣屋ら引着ら云英国学館ら着申ら幕府ら役人ら更ら相手ら不相成旨ら大坂ら兵庫ら向ら申事又横濱高館ら形行ら日本ら暴ら恐ら旨ら戦争ら始ゆら旨ら飯國ら上国王ら各国ら通文ら回し其上ら事ら申

五月九日
一只今滝川様ら被仰渡源吾事条ら今ら聖堂ら生徒ら事ら

事ら仝ら字ら迄ら事ら明ら各国横濱ら引揚ら旨ら右ら旨ら即座ら兵端ら開ら旨ら次第ら可至ら旨其上ら閣迄ら旨ら一格ら被仰渡ら着ら旨ら其英国ら已終ら義ら応接有ら旨ら

一只今當銭軍艦所ら置ら者ら由ら開ら横濱葉舩宇舩一艘ら残外ら出帆ら

一只今當銭軍艦所ら置ら者ら由ら開ら横濱葉舩宇舩一艘ら残外ら出帆ら

新徴組取締役
河野　三吾

外国奉行ら取調役並
芦川　勇　漸三郎

御勘定格ら徒目付ら
杉本　直三郎

御目付ら
藤掘　務三郎

新徴組ら取締役並出役
池田　庄八

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

新徴組之部調役

享和元年為可有之候下

五月九日
領分安房国之内洲崎江九十五坪余引受新規
御用地ニ可被成下候
山田八郎

同日
若年寄
酒井飛驒守

○撰夷拒絶之儀、仰出候ニ付、芝之浜屋敷海岸突
当深川青山屋敷へ引移可申旨及達候処、
松平修理亮殿

五月

細川家御家来堂々之人数ニ而
一橋公京より迎ニ又八月江
御家来ニ而
五月七日議奏三條中納言殿より当次之通
被
天機ニ而
御機嫌伺之礼ニ
御上京ニ候、

○京都守護

前書
被
仰渡候ニ付、

○作事奉行

以上

○神奈川奉行

以上

芳加笑
山田八郎

若年寄
酒井飛驒守

同日
設楽弾正

○京都守護

前書
被
仰渡候ニ付、
御機嫌伺之礼ニ
御上京ニ候、

一ノ
金子文美

○作事奉行

以上

作事奉行

○神奈川奉行

以上

五月廿一日

○一五月十一日彦根侯大坂御固被仰付神奈川海辺警衛御免之由

石川我八郎　井伊掃部頭ト
畑　　称ス

吉羽隼亮　五月廿五日着

此度御改革ニ付而ハ従来掃部頭殿ニ差出候書翰ハ以来ハ差出ニ不及候間其旨可相心得候

五月廿日

○一五月十一日彦根侯大坂御固被仰付神奈川海辺警衛御免之由

石川我八郎　井伊掃部頭ト
畑　　称ス

吉羽隼亮　五月廿五日着

此度御改革ニ付而ハ従来掃部頭殿ニ差出候書翰ハ以来ハ差出ニ不及候間其旨可相心得候

五月廿日

○

吉田信濃守殿
諏訪　頼之助
玉川一学殿

小笠原図書頭殿
青木兵平

此度本文之通被仰出候ニ付而ハ御用向ニ付書翰差出候節ハ御帳ニ記載之御名前ニ而差出候様可致候

五月廿五日到来

○

此度被仰出候書翰之儀一件ニ付十万石以下之面々ハ不及申上候

五月廿日

堀　　俄ニ御止被遊候　御書院番

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

鯉奥川ノ私ヲ始メ各位今日ノ場ノ件ニ付テ築地海軍所ノ私品川沖ノ各艦ヘ私ノ処ヨリ差遣ス事ニ付テ一隊物ヲ送ル事ニ付テ

各右第一通陸ノ事ニ付テ右ノ差遣ス能ク相心得ル事ニ付テ

○一 六月廿七日到来回答書 横浜ヨリ人数出張ノ事ニ付テ

各小笠原開出張ニ付長崎ヨリ一ト先ヘ人数引揚ノ事ニ付テ

右ノ通ニ付テ兼テ心得ノ為メ申越ノ事ニ付テ

歩士交代差遣ス事ニ付テ

右ノ通ニ付テ

右ノ通ニ付

○五月 外国応接

英吉利仏蘭西等之来翰和解ニ付テ

軍艦差向ノ事和解ニ及ヒ申ノ事ニ付テ

儀ヲ兼テ神奈川奉行ヨリ南日出行差留ノ事ニ付テ

全教害ヲ恐レ者ニ付テ

付テ連引ノ事ニ付テ

艦差向ノ事ニ付テ

一亜墨利加ヨリ来翰ノ事

子ヨリ取帆ノ事ニ付テ

子ヨリ本国ヘ引取ノ事ニ付テ

ヨリ差遣ス事ニ付テ

○長州藩ヨリ書翰

小笠原開出張

奥掛御

當月十日夜西風利加ニ葵船一般上方ゟ艘事ニ而
後ゟ來舟ニ而下ノ津ニ着船ニ而候處ニ而ハ無之候
右時夜ニ入ゟ行方不知候ニ付
上ゟ御手船ニ而御尋ニ被遣候處ニ而ハ無之候
○一五月十九日夜中御城内ニ而
害ニ而ハ無之候ニ付
御達振留

弥高川表ゟ參候ニ付
右ニ付協田嶋ニ而代ゟ大田彦作ゟ
今度於某所ニ付江戸ニ而
場所ニ而ハ無之候ニ付
右之通ニ而ハ無之候ニ付
○五月六日ニ日本橋ニ札ニ而
老中方始ニ而
致百人ニ而ハ無之候ニ付

松平大膳大夫
泊
小笠原壱岐守内
小栗壱右
御所ニ而退散ニ而
御名
御名

若年にして和学を一昌ホを恵徒を拝して加う多るの
商事練して分守を執す人を殺して下を商まし
害に詭士を百立作るまを以賄賂をもてぎりあ
八百家古礼 庁前家城七近う近夜を 城退出
もの七 主五月て

右各百姓共家屋敷を我ホ死屋を売て百姓を
おおそ、きよ、三千世界いたく為国から天竺と国八かそれとうるかに
そも大日本、神のみちへの神国なれ八道をやまうぐ事毎のみち仁義禮智の五常
の道を思くもりて武威をみがきいせいをげーき我国なれ八とてもおよ、ぬ外国を
国とふそ、もしろの海を越てそこそ交易をそのの使よ度々の願ヨ北アメリカよ国ヨ和蘭
院佛蘭西船もいろおろーやで様子みるとそのや頼八神奈川あれと交易おてきれ有ま八
ゝ国家愛と皆百姓共るにいらまて イキリス ゝ国のそのみ多死う一ヨ様子神奈
日本の武勇の程の盛光をんと諸大名百ゞ諸ゝ国のそのみ多死う一ヨ様子神奈
川辺八の辞退て井伊かもんさ百日向延国七方石で内藤侍後百ゞ井波さ百ゞ
神奈川奉行村ゝそ、場の住居の盛さ百ヨつくるまの祈ヶ谷辺八海と国ヲの前
さ百ヨ威勢の稲垣若狭のそのさうぞやるいぞく牛牧てそ八侍殺ゐまて松山様を
人数被て皆陣屋さ百ヨ警ゐ人ヨ様ゐ所路ゐ所ゐめてらくサテ浦井さ百風ヨ百ゞい
これその辞のまへつよゐ当田て六交渉よ武州金澤の陣屋てそ八なくて叶ゐ
米多さ百よりてヨのくしのお事ゐ井てハいせて各の
やさ給をゐいて事各の陣中ヨ百と芸て汝百ゐ事ヨ百の二乃ヨまて乃を）なるやエ
レイー

此一行甘ゐてを

忠士 七百六人 連判御ヨ

（是近し 神恩ヨ士学る国家ヨ大和へとそ

（ふく十八条ヨ北華士国ふのヨるとおらは）（古ゐてる）

悟ゐる 庁前城七ヨ百石拝領

上

直

可

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

候ニ不容易御企甲ニ探索一向[illegible]

[illegible]一向[illegible]

右之[illegible]不[illegible]

右ハ通[illegible]　廿日

右之[illegible]

十一月晦日

○町奉行東町奉行ニ而自殺

薩州家来　新兵衛事　田中雄平

[illegible]

薩州之預ケ　十一月六日

仁禮[illegible]

芸州家老[illegible]預ケ　同日

[illegible]家来　下男　太郎

右之者共東洞院錦小路上ル医師小[illegible]宅ニ而昨夜薩州之[illegible]家中之者ニ

[illegible]

○[illegible]守衛之人数之[illegible]右上京之[illegible]申上

別紙今七日ニ[illegible]上京ニ[illegible]諸侯[illegible]人数ニ

[illegible]人数[illegible]可[illegible]

急速[illegible]人数兵[illegible]

達[illegible]割合[illegible]諸家[illegible]今朝ニ至り八三

條様ニ[illegible]京ハ勿論大坂ニ而も留守居役[illegible]再応[illegible]

ニ先月廿九日[illegible]

此段申上候以上

十一月七日

[illegible]

追而[illegible]別紙[illegible]

別紙三[illegible]書添[illegible]

○姉小路様ニ而及刃傷候者三人之内[illegible]

一筆奉啓上候然者松平肥後守儀昨廿六日引渡候者共内松平修理大夫家来島津内蔵丞
足人田中雄平儀主水正儀後所和所差置私共組同心並雑色共番羅宅中雄平儀帯刀勝差
を以自殺仕候段不行届之行私共儀奉行仰付候ニ付先不及当和五今廿七日
牧野備前守殿御家来ニ而御難者仕合奉存候乍憚右ハ御為ニ上棒書如此御座候
以上

五月廿七日

小笠原図書頭様
御家来中

○隠岐守身と致し天下之大政致之候迚英吉利国ハ四十万之ものニ而其衆一ニ而違勅命ハ其罪二也宗室大臣致始メ諸役ハ攘夷之不利政説ハ其罪三也右之三罪ある天下の人皆汝の肉政食ひ汝の皮政敷んとハ若早く己の源を悔ひ門戸をとぢて再ひ大政をとる如くハ天誅政可免也左もるくハ天誅政らるんと欲す

○當五月中神奈川市中商人ら外國人へ賣込之品取調

一生糸五万五千四百弐拾四斤
代金十二万千七百三拾壱両三歩ニ朱
一茶弐拾万四千百弐拾斤
代金弐万七百八拾両弐歩ニ朱
一白米弐百十四俵
代金弐拾七両弐歩ニ弐朱
一水油百九拾挺
代金四百九拾両ニ歩
一絹糸五千九百弐拾斤
代金五拾四両
一小麦粉九拾四叺
代金九千四百斤
代金弐百両

一萬六千六百餘 代金三万

一文久元年子三月 代金七拾九万三千九百

一 代金拾四万三千ある之拾六万

紙幣之拾分之九ヲ以テ

一雑品之分 代金弐万九千弐百ヶ

亥五月中 アメリカ 和 英 佛 西 蘭 露 六ヶ国之商船ヶ有馬ニ於テ税法改正

一金壱万五千八百六拾七万 ヶ

一同四百七拾五万弐分

税法改正

出入港之数次之如

○小笠原圖書頭各國權官ニ之書翰寫

英國洋銀拝手之信書同國拒絶之事件ニ付書及

亜佛荷蘭 孛 芝 國答書寫

以書翰ヲ以ノ我邦内之人心外交ヲ欲セサル

ヲ告京師ヨリ台命ヲ奉テ應接自分ニ未タ任ニ相成ル可猶委曲

面談ニ可及ノ旨先ツ彼ノ使ヲ返ス拝具詳言

文久三ヶ年五月九日 小笠原圖書頭判

一千八百六拾三年第六月廿六日 横濱不列顛使館ニおゐて

千八百六十二年第六月廿六日及第九月十四日ニ不列顛人民害ヲ受ケ

し者の補助ヲ以て不列顛政府ヨリ江戸の政府ニ求ムる金高拾壹

ホントステルリングの所ヲ洋銀四十四万元の高ヲ三度ニ郵ス四日

廿五日廿六日」日本政府の名代外國奉行より洛手せり

日本文久三年亥七月九日　西洋千八百六十三年第八月廿四日ニ當ル

千八百六十三年第八月廿四日日本横濱合衆國使臣館ニ而外國事務宰相小笠原圖書頭台下ニ呈ス　余今日貴翰を洛手ーたり其書中台下閣下なる港ニを閔日本在留之外國人を邵ーるの全權を皇帝及び大君より受け給へるものを載す余謹んて貴翰を通答を日本政府と合衆國と礼式を執り行ひ本條約を取結ひ其國臣民右之港々ニ居住し貿易をなすを許せり故ニ此條約ハ之ニ拾て廢するを得ざるべし斯の如き方法を設るハ余ら國を愛するものニして恰も軍期を告するニ似たり

余貴翰の寫を合衆國へ大統領プレシデントニ送るべしされハ其を落手し大ニ驚愕悔歎息し輕視せしを實ニ皇帝及び大君の決定を執行ハんとそれハ修條約を取結たる諸國等と戰爭に及ぶる疑ひなるべし斯の如き事遂ニ喧ふしきまでに至らん那る皇國ニ荒蕪を招くのみるらん此大切なる職務を強て慮るニ爲そハ無益の事ニして廢置の所爲ニ非そ

鎖港の所爲ハ大なる惑ニして豈貴國の國力を量られ西洋各國の歇すべからざる權威をたゞさるニ於てハ實ニ歎息すべし余只今を台下ニ告ぐ日本在留合衆國の臣民今當港ニ在り又將ニ當港ニ来らんとする合衆國海軍を以て警衛すべし若人命危く品物

指定する時を而移さず堅固の警衛を設けたる方法を異存なり日本
余台下の書翰の意を得ぞ又斯の如き政府吹事より起る諸事を引受け又合衆國臣民之によりて悩む者」
諸損失を引受へし敬白

在日本合衆國ミニストルレシデント
ロベルトユッチプライン
手記

千八百六十三年第六月廿四日横濱にて
外國事務執政閣老原図書頭台下に呈せ
日本在留不列顛女王殿下のシャルゼダツヘールなる余の同僚と斉しく
台下大君殿下の命にて余に名當を送り賜へる告書を落手し実と
敬駕悸せり
此細故を載せる扨々報告ハ姑く置いて諭せる吹國の大君と
御門閣老なる港々を鎖ち條約各國の臣民を右港々より邸らる者ハ
下より斯く報告し給へなる皇帝の所置て拠ハ日本ハ艱難の未だ
然た知ざるを之を全く知らさるハ何んぞや是余におゐて信し難きなり」
不列顛女王殿下の名代たる余第一左條件を注目せ大不列顛と吹国との
條約を正しく相守り猶擴め加之ロ々より兵条約を自由し永久
動かさる様ひるく之を置まて日本より抗拒し能ハさるの手答るの意を表らけ調んるの
帝或ハ大君又ハ皇帝大君共ハ秘せる処の理ありて最信そてき手段を遂
一急ハ説明せられなき吹國の長官ハその権をなせへし

是以て余は國の長官憲に充件を忠告する
書を拠り不列顛女王殿下の政府熟考の上事を変せざる今般一給へる
諸種別の所置を執行ふとも妨害事に任應するへし
無之雖も余又次條を台下に告知せさるを得ず今台下より閣け給
ひたる指令書に文明不十明國の慣例に
し給ふへし大君殿下必ら水を御門に
坎るの実に條約の諸國に對し日本より軍期を告知する今速に
鎖港の論を止めさる可ふ日本國中を速に嚴酷の罪をもて罰せられん事を
右之嚴酷の告書あり

不列顛女王殿下のシャルメッヘール
シントチョンニール
エルネースチン訳、す記

千八百六十三年第二月廿四日横濱におゐて
外國事務宰相小笠原圖書頭台下に呈せる
余台下の報書を洛手せり其佛國本條約面て明ある千八百五十八年
皇國日本大君と我國君と結たる條約に基き佛人貿易の為に開きたる日本
の港々を鎖をへきことを台下より談判すへきを大君より命せられたる由を
載せたり
台下書中外國事務掛りある沸光中の手記ありと雖し余台下より回答
を日本と取結ひある條約仮令日本の行れの後人民より違ふの告知のことも
是る係らす其條約恒に全く保守すへし又其年政治去
取極めある定の如く施行ふへきものとあり結
府に於ても然りと思ふ然とも余は必台下より余に送られたる暴なる告書を佛

國に送り文明の國々も例あることを以て新に條約を破ることを修理し旦如此するを余等
嚴しく守るの方法を設け速に施行せんあるの余謹て台下に報告す帝王政府より右
回答まで追々諸條約前のごとく執行あるべし旦日本の諸官員誰を問わず台下左件を
報知あらん事を欲す日本に在る皇國佛蘭西の臣民ハ今橫濱に在る支那日本近邊水
師提督ショーセースの即たる佛國の兵士數を以て警衛し安全ならしむ
千八百五十八年に取結んある條約の音を破ることまた右水師提督
何人を別て陸又ハ海に於てそれに應ずる法を用ゐる彼の
方寸にあるべしお其謹言

在日本佛國皇帝殿下の
全權ある使
ドヤンデヘルソール 手記
書記役
ツアンテルウーテ 印

千八百六十三年第六月四日橫濱荷蘭コンシユル所にて日本大君殿下の外國事
務宰相小笠原圖書頭台下へ呈せ
余謹て文久三年五月九日付の貴翰を落手せ其書中台下
開きたる港を鎖ち條約を取結たる國々の外國人を卻くるの命を
方今京都に居住し給へたる旨を載せ右命
ハ京師より下したる由なり乍ち余ハ事を在日本荷蘭コンシユルセ子ラール貴
下へ報知そへしが條約違犯未曾聞の事にて民律に於ても樞要のる
なれ當本政府より第一條約面を固守し施行ふを務とあるそれハ非せ私を
荷蘭臣民に許せる條約を破るハ余ら
左件を說明せ當港より荷蘭人を卻くるを余ら權威に及ふまじ
の手當をして置くべし然れども其事より起る諸損亡の償を

日本政府ゟて引受けとを敬白

千八百六十三年第六月廿四日

荷蘭コンシユル
イ、ソットマン手記

右日本神奈川葡萄牙(本ノマヽ)弖ニ系ル
小笠原圖書頭台下ニ呈セル

皇の台命ニよりて條約諸國之臣民を郤け閉けらるゝ港々を鎖ゟ屓ゟ大
君(君)ニ令命を蒙ムれ　又其全權を任ゟ
余謹ゟ答ふ台下之請ニ隨ひ貴翰之眞ノ
送ゟ屓し無ゟとも序ニ余自ゟ誇ゟる
及び其臣民の利益ニ(と)關ゟるゝ條約諸國臣民を郤け閉ゟる港々
を鎖ゟとの通ゟニむつゝく最強く迫ゟるものとなり六の港々ハ兩國の全權
貴官禮儀厚ゟて調印ゟ記ゟるゟ本條約を以て開きゟめし而ゟ(に)台下ニ
おゐゟ如此命を施さゟる事ハ條約諸國ニ(ヘ)對ゟる和親貿易の本條
皇國日本ゟて政府(ヘ)閣の國ニ(ヘ)唱ムゟ屓し
千八百六十年第八月三日江戸ニ於て
葡萄牙國王殿下と日本大君殿下との間ニ取結ひ
約取替之事ニ付ゟ(本ノマヽ)屓ゟの某その任ニ(ヘ)當ゟ
を以ゟ取替セ致ゟ(陳先)たゟ余謹ゟ數言を諫ゟるの本條約を強ゟる破ふん
とのゟハ必貴國ニ最大不幸ニ關係を起セ致免れ難けれハ右ニ關ゟる
人ゟとを余力を竭ゟて懇ニ戒諫セ

葡萄牙國王殿下のコンシユル
ヨドワルトカラリ

千八百六十三年第六月廿四日金川横濱ニ於ル外國事務宰相小栗原圖書頭

台下ニ白王ヲ

余謹書輸ヲ落手セーヲ披キ其書中ヨリ台下開キタル港々ヲ鎖ル條約取結ビタル國ニ臣民ヲ右港ノ部ニ於ル全權ヲ大君殿下ヨリ受ケ給ヒシヿヲ記載シ右書中ニ台下右ニ付テ余ト談判セントノ欲ヲ述ラルル余ノ職務ナルヿヲ余甚ダ緊要ノ事ニ存ス

ヲ台下ニ左件ヲ説明スルハ余ノ義務ナルヿヲ

一般ノ民律ニ條約ノ義極ニ齟齬ヲ生ル説明ヲ日本政府如何ニシテ其許判ニ加ルヿヲ得ルヤヲ

余台下ノ請ニ因王殿下ニ政府ニ此事ヲ報告ヲ乞シ迫ル余因王殿下ノ政府ヨリ

ヲ余ニ台下ニ告ヨト千八百六十一年第一月廿四日大君殿下ニ宇漏生王殿下ヲ名代因王殿下之レゲント館ニ於テ

台下ヲ取結ビタル條約面ニ基テ余當港ニ在留ス右條約ハ昨年宇漏生ヨリ至ラルル大君殿下之使節ト故ニ右條約ニ付ル之余ノ王命堅固ヤルヿノ

下ヲ改府　御門ト雖モ偏頗ナル説明ヲ余ニ申聞ケ給ヒシ時條約ニ因テ余及ヒ宇漏生臣民ニ受得ル免許ト利益ヲ奪ヒヲナル事能ハザル故ニ余強テ因王政府又其臣民ニ許ス免許又利益ヲ捨テ或ハ全ク奪ヒヲ目的タル訪方法ニ從フ能ハス不得此條約違犯ノ儀ヲ記錄ニ見ヘ

ヲ以之ヲ告ル余ノ改府ノ申ヲ諸侯ヲ催促ハ日本改府ヲ引受ル事ヲ

敬白

在日本因國宇漏生コンシュル

フランブラント手記

○大守目付松宇恵状写

水野和泉守屋敷京地守添之小笠原通達書写

但写守ら之事

六月廿

奏室大隅守殿　　吉田信濃守殿　　常磐

右当春

大目付

覚

万石以上之面々初覲之儀ニ付　御届出差之

天氣お伺之上十ケ年月一度ニて朝覲被仰出候ニ付

但松万石以上之面々ニ而も文武之勢系之代上京之節

右之段万石以上之面々江戸参勤割合之義ニ付別段之朝覲上京ニ

在之今度西尾隠岐守屋敷ニ而来ル廿四日ニ松宇恵守殿江

○大守目付松宇恵状写　達文左之通

六月廿　津田猪

覚

今般京都所司代江被仰付候ニ付拾万石以上之面々御手伝割合之内南部美濃守儀ハ十月ゟ十二月迄江戸
田采女正儀ハ七月ゟ九月迄出京所司代向御手伝割合ニ被仰付候ニ付来亥
年所司代御手伝面々ゟ可申合候事　四月

覚

京師所司代拾万石以上之面々割合在京ニ被仰付候得共兼而申達置候来子年
ゟ之儀者当分右割合ニ不及候且又右割合之通上京詰之所司代[illegible]
可申候　右之趣拾万石以上之面々江可被達候事　四月

右之通酒井若狭守殿被相渡候旨　松平甲斐守殿被仰聞候　六月三日　津田轉

一　一橋殿水戸殿攘夷之儀ニ付許諾之願ニ指出候事

一　尾州殿上京之為火急之御登京尾州表ニ而病気ニ付[illegible]御世話之事

○若州侯より来翰

昨夕御用番井上河内守殿より御渡之御書付若狭守殿大坂表ニ而[illegible]
候之御府内[illegible]六月朔日

○一　六月三日昼四時　西丸火災上　同時本丸焼出　御殿之所消留候事難

同日暁八ツ時ゟ芝飯倉五丁目ゟ出火南風強虎之門外御普請奉行役宅近焼夫ゟ前西丸焼
出し火消不残西丸之方へ廻り候虎之門外[illegible]風強り近国侯邸へ吹[illegible]
隠ニ致候難[illegible]止ん

○御用達
六月三日西丸炎上水戸殿始詰本多美濃守在府之詰候高家之詰菊之間詰其外[illegible]役人登城於席之謁老中

一　豊前守[illegible]御用番勤之
六月五日上聞[illegible]侯[illegible]

○神奈川奉行浅野伊賀守殿より

任かせ候今般上京之[illegible]引籠[illegible]本月九日井上河内守殿[illegible]
[illegible]神奈川表出立[illegible]　六月五日

○若州侯より

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

先般ハ領分海岸ヲ多ク皇都近ク守衛ホド厚ク厳重ニ仰付ラレ候ニ
モ摂州播州辺ヨリ国ヘ帰ル者ハ後援　六月七日

○六月八日

御徒士町五人外国ノ軍艦近海ヘ来ルニ付
為ノ国令朝ノ軍艦ニテ京都ヘ参ル由

同　九日

金十枚
時服三　勅使ヲ以テ　為ノ国ヘ和歌ヲ
　　永持亨次郎
　　酒井弘蔵

同十日

○福山侯ハ　京都ヨリ為ノ国ヘ一ツノ書ヲ
　　菊地修務
　　河井錦四郎
四月廿九日ノ書ヲ以テ申シ来ル処ノ文ノ内ニ書ヲ以テ
為ノ国ヘ参勤ノ処延引ニ不及様ノ出府ノ事ヲ申シ遣ス
為ノ国ヨリ返書ヲ以テ右ノ趣意承知ノ旨ヲ申シ遣ス　六月十三日

長州攘夷ノ始末

○長州攘夷ノ始末

庚申丸ハ有志ノ者浪士都合十五人ニテ
発向ニ及候ハヾ夷船ハ申ノ秋ヨリ
を見次第直ニ三発打出ス内一発夷船ニ
行方不知事

但大砲打出ノ後右夜九ツ時ヨリ夷船ヨリ
夜長豊ヲ百ヽ碇泊ヲ数十八日ニ下来ル　右
五月十日ノ十二ノ日ノ十五日ノ都合三度
戦争ヲ
五月末浪士四人鷹司殿内ヘ参内ノ節
魁首改事情ヲ明細ニ申ノ由　安房長
長州ヲ境ニ論者ヲ両姓一揆ヲ以テ
多ク極密ニ攻撃ノ節ハ敵ノ
阿波カ

大原左衛門督幽齋卿
春嶽公を中川宮様御参内の帰途
先達横濱應接掛同船之人數
川路左衛門尉　有馬遠江守　酒井若狭守
水野筑後守　小笠原図書頭　神奈川奉行
六月三日
右同日京二條城　日光御山内　江戸西丸
同日之出火　京日光之報
九ツ高久安次郎参もの、月六日夜参
上之節何れ日光之噂話之事等
公方様去月廿八日又浪華表へ御帰之
節も相成候ハヽ一昨日小田中表之
私邸へ御立寄一服之
道之事等ふ御ことさふ御台様残多の
竹雲院様よりの達書のへさん三日之火事
夜昊之内より火を出
和宮様へ奉之
女中うの三四人も死のよふの話
前文之通長州境論とて
改しの魂こゝ家茂公不幸之境ニ
右之金子塾之事ニ付
ふ御下知
○六月八日朝五半時頃新橋の上屋敷南之方
煙立ち人騒ふ火事ニ候哉と
中奥の小姓高六千石
板倉山城守
屋敷西久保天徳寺隣

右屋鋪内土中ヘ煙消を砕キ入埋置其上を掘返し中向四人鉄を執り掘り乱鉄先砕キ折ル者多シ又砲ニ如ク玉ヲ発シ大砲ノ如ク伸ル空人即死ス内当ル天徳寺ヲ始メ所々ニ死骸ノ近辺ニ多ク止リ死ス又ハ深手ヲ負ヒ苦ムノ

○加州早飛脚但四十八時六月三日夜四ツ時本郷表ヨリ同五ツ半ニ着ス

其ノ写ス左ノ通

当二日四ツ比飯倉町ヨリ出火ヲ初メ愛宕下通御門外薪ニ黒田弥ノ大火ニ相成三日朝ニ鎮火ス 西郷死ス焼

御本丸ニハ未火ヲ不掛ト雖モ追々近ク相成候ニ付御本丸ヘ和宮様御引移ノ為メ昨二日人数ヲ以テ御守衛ヲ始メ諸大名ノ家来ニ至ル迄白装束ニテ抜身ヲ持チ無体ニ御本丸ヘ入込ミ候ニ付加州兵隊ヲ以テ防ヲ破ラントスルノ報ヲ聞テ加州兵隊ヲ以テ防ヲ破ラントスルノ報ヲ聞テ

武臭云六月三日之状未在江府親戚陽地之説情如斯候

長州暴発院
兵端始末

長州候御届書
前ニ見ユ

○在太田営某氏手柬 六月四日

長刕下ノ関ヲ利秧ノ砲場ヨリ亜墨利加商船佛蘭西軍艦和蘭陀軍艦ヲ打破ルノ風聞有之ニ付急役ヲ以テ北脇弥七郎ヲ松村半次郎ヲ昨三日向合ヲ致ノ処左之通

六月十日

先月十七八日頃亜墨利加商船佛蘭西軍艦和蘭陀軍艦ヲ飯帆致ノ近下之関長刕秧ノ墓場前ヨリ通ノ処不意ニ大砲打懸ケ候ニ付素ヨリ商船故大砲ヲ不備置ノ為メ帆柱ヲ被打破放ニ之神ヲ横濱港ヘ引返ス

六月二日

其後月日不知佛蘭西軍艦ニテ捜ニ八日本ヘハ入船ニ由同長刕秧ノ砲墓場前ヨリ差出ノ処大破被打懸車ヲ打破大坂ノ方ヘ相廻ルトノ由

六

先月廿七日頃ノ事和蘭陀軍艦一艘亜墨利加国ヘ向帆ニ而ノ前後ニ而同秧長刕秧ノ墓場前ヨリ通ノ処大砲ヲ打懸ケ三百余発打ル内蓬氣ニ而砕リ並ニ船ヘ十九発

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3　ガラス使用

并打之即死四人怪我人二人有之趣ニ候 横濱港ニ引返し申候

一 佛蘭西軍艦當港碇泊致居候處一昨二日一艘出帆致し申候下之関迄三日位ニ而
参り候ニ付右國ニ而打合相始メ申候ハヽ當港碇泊之各國船不残長州へ
相廻り可申と風聞有之候由

一 長州小倉領之墓場ニ而打合候者之由ニ而小倉領ニ而ハ
相迄ニ御座候ニ而も和蘭陀人ハ小倉領ニハ打出し不
申 横濱ニ而相聞候由也

一 右蘭船帰帆出船之節ニ而もかやうニ長崎表ゟ下之関ニ参り候長州台場ゟ
定発致し候故ニ蒸気船ニ而仕返し右ニ候処ニ而打懸候
条も仕返候ニ而相口台場ニ而相国ニ而二発放発致し候間ニ而蘭人
何ニも打出し候ニ而相通し候 何ニ而も實説有之候得共
右等之事ハ是迄申参り候由也

○亥六月横濱調役より申来候写

五月下旬佛國之同航壱艘長崎表相越し候節長州下之関沖合ニ而通行之処長
州ゟ蒸気船二艘ニ而追懸大砲数発打懸候ニ付佛船よりも無程炮発致し得勝利候得共
不意之事故敵之備ニ而不取敢右通り之儀ニ而航ニ以横濱表破損有之候処
船将方ニ而ハ了承不致船将殊之外奮激之何故右様之次第ニ及ひ候哉何とも御国政
ニ而ハ不行届之事ニ候 右船将直ニ横濱ゟ出帆長崎ニ而出越候
調ニ而上ニ長崎ニ相廻リ候而五月晦日神奈川ゟ行ん出帆致し申候 右船ニ而ハ六十
万斤ニ而大砲六十挺余備有之候 頗ル大船之由ニ御座候

一 同月下旬阿蘭陀軍艦壱艘従長崎横濱ニ相越し候節矢張下之関ニ而打懸候ニ付
百発余も打懸不得止蘭船よりも六十発程も炮発致し候而通り右船来
柄横濱ニ而追々噂候由 實ニ不法之義右を不論兵端を開キ候

趣意ト相反事ハ

一菊船ニ而即死四人手負多人ニ而菊船ハ

右六月九日之事

○長州別條

一仏蘭西軍艦本國ヨリ出帆五月十七八日比長州下之関ヨリ
入津樞密之事ヲ手碎キ帆柱帆桁モ打折ラレ散々之体ニ而
一垂里利加商船横濱港ヲ本国ヘ退帆之節同所通航之
砲ヲ受傷シ多ク大不都合難澁及ヒ漸横濱迄引返ラルヽ
一五月廿六七日比 又一説五月廿五日 四ツ時ノ事ニ 阿蘭陀軍艦本國ヨリ退帆之節
同所碎カレ長州ニ而三百発程打放之内船ヘ中リシ
餘程穴アキ横濱迄引返セリ菊船ニ而ハ船中銃丸
打込ニテ怪我人多ク餘ニ而ハ多人数ニ而ハ兼テ
破船ニ而ハ迚モ大砲ヲ放シ防ク事難シ依テ退帆ニ而
右ハ昨三日杉村半次郎ヲ定役北畠治部ヲ親見ノ上
船右北畠ヲ親見ノ上

一 フランス軍艦横濱ニアルモノハ右ヲ聞キ直ニ長州ヘ廻ルカ又ハ
退帆ノヨシ

一 アメリカハ 公辺ヨリ申達直ニ長州ヘ掛合アリシヤ又ハ
和田処 公辺ヨリ夫ニカカハラス置ルヤ 吉松 作蔵 伺ヒ
ノヨシ

武夫記

（注）六月九日紀聞

先ツ横濱ヨリ着ノアメリカ三ツ檣ノ軍艦ハ長崎ヘ長州ノ軍艦ヲ大砲ヲ以テ発ニ逐レ半時ニ
横濱砲台ヨリアメリカ船打掛ケ候ヲ聞キ長州ヨリ発シ候前ニ仏
国西洋築高松一艘ヲ半分沖ニ打沈メ大砲ヲ取リ上ケ候ヲ聞キ
申ノ大砲破損ニ及ヒ候ヲ聞キ仏船ハ長崎
ヨリ破損ニ及ヒ候ヲ聞キ仏船ハ長崎ヘ逃行ヲ聞キ
ヨリ横濱ヘ着ノ軍艦ヨリ詰掛ケ候ヲ聞キ横濱砲台ヲ破リ候ヲ聞キ
和船横濱ヨリ破船ニ及ヒ候ヲ聞キ横濱出帆ノ亜米利加軍艦ハ
長州ノ二艘ヲ蒸気船ヲ以テ追掛ケ亜米利加ノ軍艦ニ至ル迄ニ二艘ノ内ノ
一艘ヲ蒸気船ヲ以テ追掛ケ亜米利加ノ軍艦ニ至ル迄ニ二艘ノ内ノ一艘ヲ大ニ破リ
蒸気機ヲ損シ二艘ノ亜米利加ノ軍艦ハ何レモ長崎ヘ入港ニ及ヒ候ヲ聞キ

[illegible]近ニつぶれ不矢倉ヲ直ニ不[illegible]ヲ[illegible]
ヲ破リ[illegible]裏ニ立[illegible]兵士五人ヲ[illegible]ラ[illegible]
下ノ[illegible]帳行所ニクレアントコーケルコーケルト[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]異人ヲ[illegible]ヲ[illegible]
ヲ[illegible]場ニ[illegible]ヲ五六[illegible]
[illegible]合[illegible]ヲ[illegible]

一 [illegible]

[illegible]ノ[illegible]ノ上陸[illegible]

[illegible]世界ニ[illegible]

[illegible]暴虐ニ[illegible]

[illegible]英[illegible]

[illegible]

[illegible]

と雖も必ず是を降さゞるを以て実に容易ならず終に
中止了

○在横濱太田陣営某氏より報

翁曰長州候より赤間宮を以て軍艦を回送の義申込
来候に付き直ちに出帆の処悪風に逢ひ上陸するを
幸ひ途中より引返し下関に着せしは十六日の事
焼棄て萩の城下を攻んとせしに毛利家より謝罪
書を以て降参を乞ひ実に横濱の軍艦を迎しめんと
紀伊公英国へ滞留の長崎奉行を召還の命を以て
塚十三郎と云る運上所定書取調の為め大目付
ことを右の長州侯を死人多きことを
あまり残念と云ふ事にて
ことを云ふ
○六月十日両角玄倫宮本彦之進横濱陸に在
方今の事情聞き次第左の

此度長州より貴国仏国蘭国右三ヶ国之船を討候申風聞ハ如何ニ候哉と承合ニ付向国之
商船此程被討候ニ付通ひ申候所右船人ニ恨無之とて度仏国之船通行之節被討
其先格別ニ候得共此度蘭船ハ此程之復ニ船大破損死人怪我人も有之候よし
尤右趣意ハ未申ト右仏国之軍艦直ニ出帆長州ヘ相廻り不意ニ討之長州之軍
艦弐艘内壱艘沈没壱艘ハ打砕き多人数死亡 右軍艦ニ居候ニ長州侯 四艘相成候船のよし 其後も二ヶ所討
サランパン 是ハコハレテ とりこ之由 其上下之関ニ而港焼払武器其外分捕いたし一昨日 八日之事 夕刻帰港
横浜ヘ帰帆いたし申候ト申事ニ御座候 此上之模様如何と問候所此上ハ長州より手出し
サイ不致候得ハ夫より不構全く長州理不尽ニ付右故仏国始怒り候ゆゑ各国不残長
州ランニクムダアート軍ハ如何と問候所長州右之軍サ止メハ致スマジク左スレハ一同ニウチ
一同申附候ハ軍サニ相成可申哉と聞ト右何も内話々々と申聞ケ候 夫ハ柔ゆる様子
未申述引取申候 六月十日

○六月十八日及十九日付在府家内氏ゟ報
追々御聞及之通り去月（五月）十日より下之関ニ而戦争相始り候而米国商船壱艘下之関ニ
砲撃致し候ニ付長州之軍艦弐艘ニ而打掛ケ候所米船退帆致し候由同月四五日比（三日）米国
商船壱艘下之関ニ参り候ニ付入長州軍艦弐艘打掛ケ候所弐艘ニ而長州船
軍艦壱艘も甚損し候ニ付難致逃去候由 米国人も右上陸大筒火門ニ而悉打
打込下之関ヲ放火致し引取候由 夫より両三日後ニやフランス軍艦下の関ニ参り陸
地之様子ニ手向ふ人無之先甚損し両三発大砲打掛ケ候へ共甚損しては一発之銃声も不致ニ付
右書て上陸致し候所皆之余程以前ニ逃去り候事ニ而残る人も無之様ニ而其辺四五
里之間皆引退き候も其之人も出会不申ト申之之茶屋引取同所ニ積置候米
之火薬ニ残武器取いたし取り候て退帆其後横浜運上所ヘ参り右之数其外兵火薬
武器其外一切返却之候と勝軍之方ニ而本国へ申上候て一度国王より申渡し上ニ而返却

一右談ニ承候処長州ニ而理不尽ニ米国軍艦を打候事件ハ罪ニ一つ之無御座候ニ付
政府ニ而征伐有之筈之処ニ而も国中人心不和合ニ付先ハ右も出来兼
候ニ付当時之合ハ自国ニ而軍艦引運出し長州を征伐致し大勝を得候ニ付政
府ニ引渡一ケ年ニ及候上ハ政府之命令ニ背き理不尽ニ米国船を打候罪ハ政府ニ而度
料三百万弗を取度ニ而承候退帆致し候由右船九月比ハ長州ニ来ル一ケ年ニ而横浜ニ而御開
ニ而も当分米国人上陸ニ而ハ護衛とも長州ニ而ハ人質ニ死失ニ而当分ハ甚危険ニ付
去ル谷ニ隠し居候ニ付山上ニ小流ニ井戸有之家長州方ニ而ハ狼狽致し
廻り候事有之小流ニ従ひ参り皆船ニ乗テ戸打ハ候由誠ニ事ニ相当ニ而無之
一昨日ハ誠ニ一向ニ而御座候得　還御ニ承候ニ而ハ様ニ而御保ち如何ニ致や
御沙汰ニ而右船之ハ　御伺ニ候ニ而又ハ兼候由
一青蓮院宮御出奔ニ而御免ニ成居候由ニ而御出と承り候事ハ一々承り居候風聞ニ而御座候由

一御止ニ而も又ニ而御出府ニ而能く様ニ而も御事ニ而も御申出候ニ付而ニ候や様ニ相成候
ニ付ケ様十分ニ及　　角斗印
別紙之通り候而御宿所之儀ニ付て戦争ニ付長州ハ小倉ニ而ハ勢ニ戦ニ付小倉
之ハ何ニ戦ニ而も尊書ニ而も長州様ニ而も支配ニ而右之人も信用致し小倉ハ
論ニ候ニ而も右思ニ而候処ニ当てハ小倉ニ長州ニ而合ニ而来一ケ年ニ而も事ニ及候事
戦争ニ而も是砲玉小倉ニ而御領分ニ而ハ戦ニ及候由小倉ニ而ハ何事ニ相成候
ニ付皆山ニ而ニ移り申候ニ大事ニ至り候事無之様ニ相成候由
右之通りニ御座候　六月十九

○横濱吉田町関門上番之話
六月朔日佛郎察（亜墨利加）軍艦一隻又長州ニ而来家臣ヲ宍戸毛利居城長門ノ府中海岸下ノ関稜ニ砲台近
ニ船を寄せ忽台場ニ大砲を打掛ル仏軍艦ヨリハ八十ポンド銃ニ而台場

塔ヶ谷ニ打放ノ丸毛利之数弐拾人程ニ而即死怪我人も多ク有之一番ニ
突進去ル桁子付佛國小銃隊（バリンロン上陸ノ節ノ一隊ニ候）上陸ノ砲
台ヨリ高キ地ノ陰ニ伏臥而人計モ殺ス所ヲ右ノ佛ノ海軍士押寄ル時ヲ利方ヨリ鉄砲
モ打ク寄ラ槍刀ヲ以待受ケルニ佛人銃隊ヲ進メ手ニ〳〵打ラル故ヲ利勝ル死傷
シヤルニ〳〵敵ニ敗走ニ而其ノ佛軍艦焼失ル多ク其上營
塔柵等ヲ大銃強薬ヲ以焚砕裂ク等ノ為メ打ラル死傷
火門ニ汀ヲ手再ビ用ラル様ニモ無之候ニ依テ佛人多捕ニ由ル九曜
ノ紋所ヲ絵ル種類一ツ槍刀ヲ見ル不軍艦ヨリ持帰ル手段出来
横濱着港右ノ品ニ於長州方捕ノ物ニ申述軍上所ニ差出ス由ヲ
ルヲ其ヲ右一条長州ノ一切當港ニ於テ実否如何
ヲ陳明後ヨリ外ニ実ニ長州ヲ多捕ニ品ヲ不審ヲ
あらざる

一佛人上陸ニ節長州ノ敵ニ向倒ヲ有之人俄ニ破ニ起ルニ依テ佛人ニ
かぐら改ニより敵ノ気象ノ人ヒ
一日限石相分 六月廿日 青木次
ル亜米利加軍艦一隻長州下ノ関ニ碇泊ヲ
のぞき航海ノ為ノ人家ヨリ一件ヲ
軍艦三艘海口ニ碇泊ル亜船近
ヲ実用ニ之亜者ヲ察シ在シ
り小倉領豊濱通ニ砲台ヲ長州ニ計ラ合期不改不得ル
右砲台ヨリ海面ニ船ヲ向ケ双方打合ニ
ニ打ツケ敵ヨリハ一発ニても長州ニ
艇破砕ヲ為ニ船ヲ打ツケ海底ニ隔没一隻ヲ
ヲ得ル退船ノ如ク亜船十ル勝利ヲ

りト有小倉領も以之外ニ動揺いたす長州領より小倉領ある海岸を得て向ひ合ことゆゑ
近き所ハ漸五十間位ニ有之それ故ハ悉小倉領一統老幼男女東
西ニさまよひ南北ニ走り泣呼ひ聲響ニ有之由亜人申聞ケ候
右も亜墨利加上所へ乗出し候諸色并長州御手當有之候而砲撃致候ハ、 小倉田
一蘭船も下之関辺ゟ大砲を打候處方々ゟ撃立候而柄打合ニ御座候
重亞地圖を按ルニ小倉領田の浦長州領前田長府之海面甚狭
し小倉領へ乗取り候ものなしと云ハ古送のなるへし
右在太田陣営鈴木氏所記ニ付
〇長州打合之事小笠原様御當番出張之事其節長州海岸ニて
夷人ハ人ふ居住三里程皇の山へ籠り田畑ヲ皆荒し狼狽して立退候趣
一右故之夷賊共ハ一千余ニ上陸大砲ニ釘を打焼捨ハ船へ運ひ其外之品々

一切手を不出候而も御手当被成長門守殿ゟ少々も負候義無之異国船へ放火致ス
来り居候ニ付居在別之諸役船も無之二艘ある迄ゟ殺傷死亡船を焼（自）
（在カ）立ニ及ひ候ハ何も見物人迄も雑説ニ長州ゟ承り候事長州侯之意ニ不服
候ニ付大ニ出来を待ち候迄有之候而元理ニ叶候ニ付加賀様
諸国も無之趣右之少も御座候而語ニ候ニ申候

房州小湊村
庄蔵
亥三十八

〇神奈川奉行ニ而取調書
亞國ワイラシン水先案内として当所居住人姓某乗組出ノ處
此度（段カ）申上候私儀五月廿八日亜國ワイシシン船ニ水先案内として当所横濱
湊出帆豊後土佐両国之間ゟ周防灘ニ出當月朔日四ツ時頃長州下関海
岸通船ニて砲合図ニ候哉岸上ゟ砲聲両度相聞引續其臺場ゟ数發打

放たせ茶下之関通船之節大砲打掛ケ諸所ゟ同様ニ而有之左候得共當
方ゟも砲發いたし一戦ニ而及共心得ニ而一ヶ所居合申之前條長州ゟ大砲
打掛候ニ付亜船ゟも發砲致し追ニ打進ニ（進ニ而）逃ニ若不知孤島ヲ長州地方
ニ僅二三町程之場所ニ長州之軍船三艘備有之候場所ニ趣右三艘之間ニ
乗込左右之船ヘ諸手之臺場市中ニ數發打候を以焼玉を込
三艘打立ケ内壱艘ヲ不残焼払ケ有之壱艘ハ水中ニ飛入
多人数海中ヘ逃入候由ヲ已ル時過ニ至ル臺場ゟ砲発打絶亜船之方ヘ壱艘船
を焼砲臺ニも砲声絶ケ故十分之勝ヲ得ケ様子ニ而逃去ト蒸気船追打いたし候ニ
右場所引取候節亜船ゟハ砲發いたし目的ニ當り得ヲ鉛ニ打込候ニ付三郎
死五人怪我人三人ニ而死人を帆木綿ニ包ニ両足ニ弾丸を結付ケ底ニ沈め候ニ付之
前書雪之九半時頃迄ニ戦争相成直様ニ出帆仕候宣ぶ説佳々候ニ御座候
亥六月廿八日

○越前高田今町表ゟ長州ゟ遣候手紙　紙屋町萬屋卯兵衛ニ而
写来ル
當五月十日イギリス（アメリカ）商船壱艘来ル所地方ゟ大砲打掛候ニ付船ハ
支五六度程打申候
同廿三日フランス商船壱艘上方ゟ参り地方ゟ大砲大ニ打懸ケ候処
蒸気船ハ釜屋ニ當り大ニ死人有之其上大将速死之由長崎へ乗参候
五月廿七日（六）下ノ関アメリカ（和蘭陀）軍艦蒸気壱艘参り是ハ大ニ打掛候ニ付地方之侍衆人数依
壱人ゟ多之人家をせニ痛も在之候よし
六月朔日亜墨利加軍船壱艘参候此時ハ双方ゟ大ニ打合長州ゟ沖ニ之角場掛り船武
艘ニ而候ニ付壱艘打去つめ候處大ニおそれ候て出帆候ニ付地方之火船壱艘參
之家壱軒寄船参り候ニ付立寄候而軍船ゟ大筒大ニ打掛ケ人數ニ當り渇ニ付候

死人十二三人有之アルトモ知レズ怪我人も有之候ト

同廿四日ニ上ノ関ニフランス軍船弐艘参リ双方ニ大砲打合申ト候、田之浦之勝、

子ノ方ニ寄リ来リ候ト申候ニ大砲打掛リ小舟入船ニ大砲積込候以上七艘来

艘ニ三拾人程乗之家辺并道筋田ノ浦辺ニ参リ御城を目懸ケ打掛ケ候ト申候

以之上陸致し築崩し候而以前よふかいる、合戦ト人家拾四五軒火を掛ケ

焼払ト申候方ニ七人死人有之候よし此節之儀ハ大カツセンニ御座候

同所ニ而一時夜戦ニ及ひ候よし

……小人数ニ而も不出候小人数ニ而打払ひ

壹艘ハ……負ケ候而船……

〇別段長州廿五日之合戦ニ討死五六百人と申候

……七日之合戦ニハ郡国より撰兵出而大勝利と申候

長州為御様御親兵ニ而……通

為……監

阿州　水戸　会津　肥後　土州　久留米　岡山

……人数三万人余

贋物不可信

〇長州侯御届　亥六月廿日

去ル四月廿三日京都表御暇ニ而御国付ト罷　内裏御所御締ニ付南普天門

御警衛ニ仰付ニ付指揮被上京仕度ト而当六月朔日領国沖合ニ而

異国船壱艘破致し候様子ニ而……

以……物頭……大炮打掛候而……船……引揚候

進向後……同二日打続……船二艘破致……

様子……先手頭益田……大炮打掛候而二艘打砕……

艘ヲ逐退帆仕候而同三日辰刻頃英人ヲ乗セ
来リシ艘軍艦ヲ以テ暫時談判致度申出
浦町陣屋ヘ重役出張有書翰皆読ノ処
打払同二日佛蘭西ヨリ船ヲ以又程不
彼是言役ヘ談判及ビ其翌日ノ出迄申出ノ
ヲ幕府急ヲ以テ一ノ飛脚ヲ申出ル
談判家臣ヲ幕府ヘ差遣ノ上御沙汰
書又差出ヲ幕ヨリ仕切候ハヽ必有締
船ヲ郎ヘ越ノ場所ヲ仁ノ人ト不知
文モ有之迚ノ翌日早速人数差出ヲ
ヲ以テ同十日暁富ノ刻頃英佛ヨリ軍艦八
船ハ不申ヲ以テ先ヲ其ヲ死ヲ散乱ノ
艘計ノ内ヲ人数探出ヘ大砲打掛ケ
死亡不少様子ヲ見ヲ早ヘ引返
千住軍艦ヲ出シ沖ヲ大砲打放シ
陣屋ヘ罷在ノ処ヨリ馬ヲ以最早ヲ人
ハ先ヘ遣ヲ不意ヲ大砲打掛ケ談判ヲ
乱妨ヲ及ビ候ヲ以テ同姓長門守分ヒヲ
還下度趣ヲ以テ千余人出張ノ処ヲ
候ヲ矢申ハ私事未完ヲヘ脇益田工員ヘ
船ホヽ引取ノ処ヨリ脇益田ヲ従ヘ打
一ト発上陸ノ旗指物悉奪取候ヘ
ヘ分先ヲ其ヲ死ヲ散乱ノ処ヨリ追ヘ
艘計ノ内ヲ人数探出ヘ大砲打掛ケ
死亡不少様子ヲ見ヲ早ヘ引返
千住軍艦ヲ出シ沖ヲ大砲打放シ
陣屋ヘ罷在ノ処ヨリ馬ヲ以最早ヲ人
ハ先ヘ遣ヲ不意ヲ大砲打掛ケ談判ヲ
乱妨ヲ及ビ候ヲ以テ同姓長門守分ヒヲ
還下度趣ヲ以テ千余人出張ノ処ヲ
候ヲ矢申ハ私事未完ヲヘ脇益田工員ヘ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

死亡仕葉候人数領内之者丸四百廿人死失仕候事実ニ私
哲輝ニ守衛怠ニ候段仕方何共申訳無之候 御国ニ対し奉
恐入候事ニ存当地上ゟ 御丹誠奉願上候 仰出之趣
承知仕候 御国ニ住居之者敬之候ハ 仰出之事ニ候
以上

六月十日

松平大膳大夫

○長府侯與長崎鎮臺書三通

一筆致啓達候 天朝醜夷掃攘被 仰出猶従
当月十日夕七時前上筋ゟ異國
者領内赤馬関を始其外ゟ手当之人数差出置候所
蒸気船ニ而壱艘乗下り在所府中沖合之義者豊前地ニ寄致通船田之浦ニ
沖ゟ致錨泊候ニ付物見船差出候所亜墨利加船ニ相違無之段及注進候ニ
候得共領分地方ゟ間遠何分失先届兼候ニ付本家松平大膳大夫ゟ軍艦二艘ニ
分乗下ゟ候ニ付大膳大夫ゟ兼て赤馬関ゟ差出置候人数并拙者家来ニ合右軍艦ニ
乗組同夜半過数度砲発致し三度異船ニ打込其余の義ハ暗夜ニ中不申相
分兼候上筋ゟ致退散候様ニ付其後弥之訳ニ而昼夜之義ニ付船影
茂不相見候段猶又及注進候右之段為可申述如此ニ座候 恐惶謹言

五月十七日

大久保学後守様

服部長門守様

毛利左京亮

一筆致啓達候当月廿二日夜九時頃拙者在所府中沖合ニ異國蒸気船ヲ艘致錠泊候ニ付為及応接ニ呼仏蘭西國船ニ相違無之候ニ付ラ海軍の用意致候ニ呼置廿三日曙ニ至リ領内赤馬関ニ向乗下候ニ向本家松平大膳大夫軍艦并諸呼砲墓ノ義数十発打掛ケ候ニ呼数発仏船ニ打込バツテイラヲ艘打取ヲ本船ニ破其外船具致漂流候ニ付取置申候尤候破船ニ候彼ノ義両三発及

砲発候ニ呼別ニ人命ニ害ヲ乗通リ候ニ付本家軍艦ノ進追打致候ニ呼帆船ヲ西海ニ乗去リ候ニ付後物見船差出候ニ漸ク帆影ヲ不相見候ニ付及注進候右之段為ニ申伸如此ニ座候恐惶謹言

五月廿五日

服部長門守様

毛利左京亮

名乗書判

一筆致啓達候当月廿六日朝六半時頃異國蒸気船ヲ艘西海ヲ乗入ヲ拙者領内赤馬関沖ニ致通船候ニ付本家松平大膳大夫軍艦且此方諸呼砲墓ノ義数十発打出候ニ呼赤馬関亀山社楼門迎廊屋根其外諸呼并町家

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

四軒ヲ打込申々拠ノ場所ニ於テ有之候得共
中沖合之義ハ遙ノ前地ニ寄通船上筋ヘ向乗去リ候物見船ヲ出シ候
其後追々船影不相見ニ付及注進ノ右之段乍ラ下述如此ニ候恐惶
謹言

五月廿九日

服部長門守

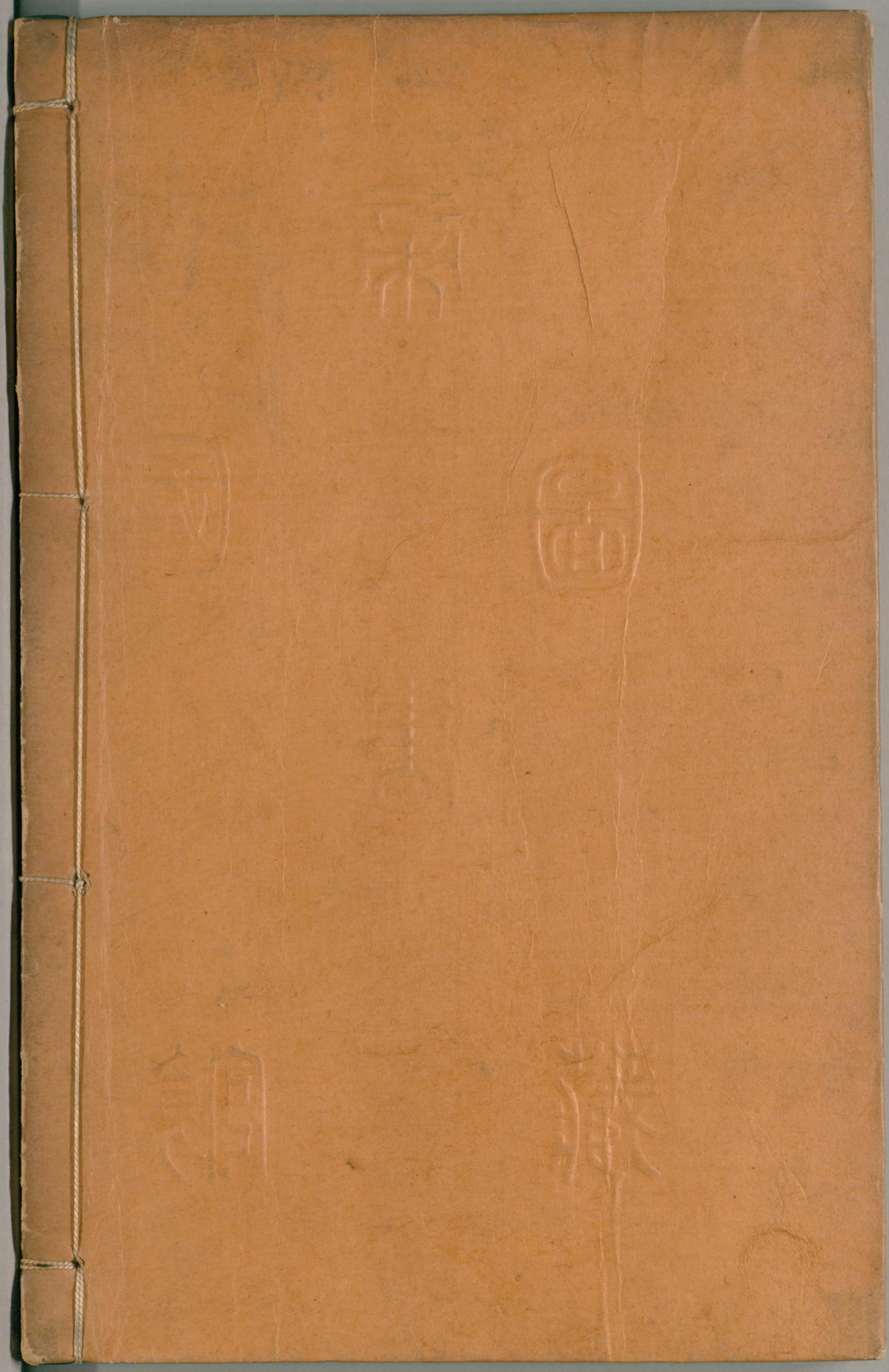
毛利左京亮

名乗書判

836
209
3

国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用